ラプラスの魔女 短編集

葛城　炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラプラスの魔女　短編集

【Ｎコード】
Ｎ８６１８Ｐ

【作者名】
葛城　炯

【あらすじ】
ワタシの名はラプラス。ラプラスの魔女と呼ばれる存在。
アナタには選択し得る未来がある。
アナタの死と人類の死。
どちらを選ぶ？

これは「ラプラスの魔女」シリーズをまとめたモノです。
少しだけ改稿したところもありますが９９．９％は元のままです。
悪しからずご了承下さい。

1．ある宇宙パイロットの選択（前書き）

1／2の選択
1／2の確率

1．ある宇宙パイロットの選択

「くそっ！　なんて事だっ！」
オレは粗末の宇宙船のコクピットで喚いた。

何故、喚いたか？
喚くしかなかったからだ。

「ラグランジェ2ステーションの整備屋めがっ！」
睡そうな目をした痩せた男のコトを思いだし、八つ当たりする。

「アイツが手を抜いたに違いないんだっ！」

それは違うだろう。
だがそう思って喚くしかオレに残されたことはない。

何故かって？
話は数ヶ月前に遡る。

外惑星領域に地球のアマチュア天文家がある「影」を見つけた。
最初はレンズのゴミかと思ったらしいのだが、ソレはレンズのゴミじゃなく、そしてそのアマチュア天文家が捜していた新しい彗星でもなかった。
ソレが何かは……世間の有名天文学者様達が挙って論議する状況になっても変わらなかった。
ある学者は「ガスの塊」だと言い、別の学者は「高分子の氷」と言い、巷の怪しい宗教じみた著名人は「宇宙の霊魂だ」とか言い始

める。
とある有名人が「ＵＦＯだ。やっと宇宙人が地球に来訪しに来たのだ」とかいうのは……「アレは反物質の塊だ」とか言い始める狂信科学者よりは、ある意味、「常識的」な反応だったろう。

兎に角、誰もソレの正体は判らなかった。
外惑星領域でも軽元素は太陽の光で蒸発し剥がれていく。ところが水素ガス（つまりは陽子）反応を示しソレを繋ぎ止める重力もない大きさの塊が太陽系内惑星領域に突入してくるのだから。
途中の外惑星の重力影響とそれに伴う軌道変化で、ソレの質量は判った。
大体、直径１０ｋｍの岩と同じ。

彗星？
違うと最初に言ったはずだ。

ソイツは尾を引かずに塊のままで突入してくる。そして太陽の反射以上に輝いている。
軌道？　ソイツが判ってからは一部の天文学者しか興味を示さなくなった。

誰か……煽ることしか知らないどっかの新聞記者が「地球に衝突？」とか煽った時は騒ぎは物凄かった。
さっきの「ＵＦＯ？」とかもその時の騒ぎの記憶だ。

ところが精緻なる地球の電子頭脳と電子頭脳を駆使する学者様の手により、その地球への衝突は有り得ないと結論されて、世間の興味は雲散霧消した。
ソイツのコースは太陽直撃。何の物質であろうと直径１４０万ｋｍの核融合反応炉に放り込まれたら一瞬で消えて無くなるだろう。

ところがだ。
やっぱり知りたいという知識の欲望は1つのセンサーというか観測機器となってオレの元に届けられた。という訳さ。
地球〜月〜各種宇宙ステーションを気ままに往復する個人営業の運送屋にだ。

「コイツをこの地点、大気圏突入近くで離して欲しい。その後はこの観測機器が自律航行し、あの天体を目指して飛んでいく。極単純に言えばだ。つまりは爆発ボルトでアナタの船に接合させてくれないか？　後は地球と金星でスイングバイしてあの謎な天体に接近し、観測データを我々の元に届けてくれるはずだ」

ああ。
確かにオレは何年ぶりかで地球に帰ってバカンスを楽しむ予定だった。
積み荷なんて何でも良かった。つまらん月の鉱石でボロ船の図体の割にはヤケに小さい荷室は一杯だったから外に繋げたのはヤツらの希望でもあったし、小遣い稼ぎにも丁度いいと思ったさ。

ところがだ。
爆発ボルトの1つが予定より早く爆発しやがった。

観測機器？
ソイツはブラブラしながら残りの爆発ボルトで辛うじて繋がっている。

設計ミス？
違うな。
ただの不良品だ。

爆発ボルトの不良品がロシアンルーレットのようにオレの所に廻ってきた。
しかも火薬の量が多めに詰めこまれた不良品が。

オレにとって運の悪いことに接合箇所付近にあったのは通信機器で、爆発と共に通信不能になったことだ。
おまけに通信機器の破壊に伴う電気ショックか何かで燃料がノズル近くで漏れ出している。
とてもじゃないが大気圏突入に必要な逆噴射と、宇宙空港までの滑空には足りなくなった。
いや？　それ以前にこのボロ船が乗っかっているのは地球への垂直落下コースだ。

なんてこった。
太陽への垂直落下コースの天体への観測機器を抱えたオレが地球に垂直落下だ。

救いの手？
ある訳がない。
お偉方は経済とかいう数字の睨めっこに日夜明け暮れている。御高名な天文学者様達は外惑星開発宇宙船の設計で大わらわだ。毎晩、天体望遠鏡を覗いている方々も些末な個人営業宇宙運送船は邪魔だと思う程度で軌道計算なんぞしてもいないだろう。

もっとも……
判ったところで、どうなるモノでもない。
通信機器は壊れてる。
軌道計算プログラムも動作が怪しい。
それ以前に、エンジンに火を入れたら漏れ出した燃料が気化して軌道がどうなるもんだか判りゃしない。

オレにできるのは……コクピットの安全設計とやらが大気圏垂直落下にも耐えられる代物であることを祈るのみだ。
……そんなコトは皆無だが。
中古で買ったこのボロ船にそんな装備があるはずもない。そんな装備があるクラスの船ならもっと楽に仕事ができているはずだからな。

「くそっ！」
コクピットでできることは喚いて何かを叩くことだけ。
それでも何とか生き残りたい思いで、重要部品は叩かずに済ませたいた。
「……誰か、オレを助けろよっ！」
何度目かの当たり障りのない殴打で……不意に通信モニターに何かが映し出された。
さっきまで砂嵐だったモニターに……

いや？
今でも背景は砂嵐だ。
砂嵐を背景に映っていたのは……人形のような少女。
目をパチクリするオレにその少女は話しかけてきた。
『……助かりたい？』
なんだ？　いざという時のメンタル・ヘルス・プログラムか？
それとも整備屋か前の持ち主がセーブしていた暇つぶし用のなんかのゲームかビデオか？
『アナタには２つの選択肢があるわ。どちらを選ぶ？』
２つ？　さっき計算したポロ船の軌道計算プログラムは地球垂直落下コースと断言していたが？
「２つって何だ？」
画面に向かって問い掛けてしまった。
反応する訳がない。ビデオか何か……メンタル・ヘルス・プログ

ラムだとしてもこんな状況は想定していないだろう。
『単純に言って……後世に名を残すか、後世に名を残さずに生き延びるか、死に絶えるか……の２つ』
反応したのだから、これはビデオの類ではない。ならば、プログラムか？　だが、人間が作ったプログラムがこんな反応を……いや、待て。助かる？
「助かる方法があるのか？」
『あるわ。……でも、どの方法を選んでも確率は１／２だけど？』
２つに１つならば１／２だろう。
『違うわ。どっちを選んだとしても確率は１／２。運が良ければ名を残して生き残れる。運が悪ければ名も残らずに生き残れない。だから１／２』
つまり？
「どっちを選んでも生き残れるのは１／２……ということか？」
『……そう。生き残れる確率は……もつれてハッキリと計算できない。どんな時でも。だけど両方に生き残れる道はある。最大と最小の道を選んだとしても、その両方の確率を足せば１／２。もちろん……』
「名を残さない方が生き残れる確率は高い……ということか？」
モニターの中の少女は頷く。無表情に。
「だったら決まっている。生き残れる確率の高い方だっ！」
オレは叫んだ。
誰だってこんな状況ではソッチを選ぶ。
『そう？　その前にもう一つ言っておくことがある』
「なんだ？　さっさと言ってくれっ！」
『あの天体は……虚数空間物質でできている』
あの天体？　このボロ船にくっつけた観測機器が向かう予定だったあの謎な天体のことか？
『そう。アナタが助かる最大限の確率を求めて行動した場合、あの天体は……地球に落下する』

なんだ？
どういうコトだ？

『虚数空間物質がこの星系の星間ガスと反応した結果として水素ガスと同じ輝線で輝いている。だが地球に落下した場合……虚数空間物質は反物質へと変わる』

つまり……反物質爆弾というワケか？
直径１０ｋｍの岩と同じ質量の反物質が地球に落下する？

「……地球の何処にだ？」
大都市ならば……万人どころじゃない単位で人が死んでしまう。
『何処でも同じコト。衝撃波は地球を数周する。陸地に落ちても衝撃波は海上に達した段階で津波となる。その前に大気の衝撃波自体であの惑星上の半数の生命体は生存できないだろうけど』
大都市は……大抵海岸縁にある。生き残れた人々がいたとしても……地球の文明は壊滅する。

いや。
地球だけじゃない。
月基地や宇宙ステーションだって壊滅する。
地球からの物資輸送で生きながらえているのだから、地球が壊滅すれば……

「つまり……全人類が死滅するのか？」
『そういうコト。アナタが自身の生存確率を最大に求めるならば、あの天体が地球に落下する確率が最大となる。それだけ』

沈黙した。

沈黙するしかなかった。
自分の呼吸が嵐のように感じられた。
心臓の鼓動が大地震のように感じられた。

「……どうしてそうなる？　そういうコトになるんだ？」
『アナタが助かりたいのであれば……エンジンに点火し、あるタイミングで観測機器を放り投げる。それでアナタは大気圏に緩傾斜突入し、しかも宇宙港近くの砂漠に着陸できる。だけどその時に放った観測機器があの天体に突入し向きを変える。太陽スイングバイの地球衝突コースにね。それがアナタが最大の確率を選択した時に確定する未来』

そういうことか。
数十ｋｇの観測機器でも反物質との反応だと……天体の軌道を変えるには充分だ。

「オレがこのまま何もしなかったら？」
『アナタの生き残れる確率は最小となる。そしてアナタの名前がある天体に付けられる。アナタにこの仕事を頼んだ人達の呼びかけでね。そして……あの天体はあるアテン族の小惑星と衝突し分裂する。大体、金星軌道上で。そして分裂した破片の一部は……月とアポロ族の小惑星に衝突する。それがアナタが生き残れる可能性が最小となるときに確定する未来』
「大した被害にならないのか？」
『いいえ。月の基地は壊滅するし、小惑星も破壊されて……破片が数百年間にわたって地球に降り注ぐコースを辿るわ』

つまり？
「俺が助かる選択をすれば地球に死刑が即時執行されて、生き残ら

ない選択をしても……」
『「宇宙からの鞭打ち」というダメージを受けることになるわ。キチンとした対応をすれば……地球は壊滅しないと思うけど？』

どっちも駄目だ……な。今この時、オレが生き残れたとしても、その後の「鞭打ち」でオレが救われる保証はなさそうだ。

……ん？
まてよ。
「どの方法を選んでも……確定はしないと言ったな？　オレが生き残れる確率は……総ては1／2だ。と」
オレは……やっと少女が最初に言った言葉の意味を理解した。
モニターの中の少女はクスッと笑ったように見えた。
『ええ。言ったわ。表現は違うけど……』
「表現はどうでもいいっ！　その方法を教えろっ！　オレはその方法を選ぶっ！」
叫んだ。
もうソレしか選ぶ道はない。

方法は……単純だった。
観測機器を切り離すか、エンジンを点火させる。
そのどっちかだけを実行するだけだった。

「つまり、2つのうち1つだけすればいいんだな？」
『そう。両方実行すればアナタが助かる確率が最大となる。両方実行しなければアナタが助かる確率は最小となる。片方だけの実行でアナタと地球の両方、もしくは片方が助かる確率は……』
「確率は？」
判りきったことを聞いた。
『それぞれが1／2。最初に言ったでしょ？』

そうか。そうだな。
「そのどちらかで……両方が助かる確率が１／４、オレか地球かが助かる確率が１／２、両方とも助からない確率が１／４。……そういうコトか」
『そう。方法は２つ。１／２の方法が２つ。最大と最小の確率の狭間に……最悪と最善の狭間に現実（リアル）がある。どんな時でも……』

そうだな。どんなときでも……２つの選択肢があるのか。
『じゃ。ワタシにできるのはこれだけ……後は確率を祈ってて』
「最後に１つ教えろ」
オレは画面に向かって言った。
「アンタの名前は？」
少女はクスッと笑った。今度はハッキリと。
『ワタシの名はラプラス。ラプラスの……魔女。アナタの星ではそう呼ばれる存在』
なるほどね。オレは未来と確率の魔女と話していたのか。

直後にアラームが鳴った。
『逆噴射シテクダサイ。逆噴射シテクダサイ。接近速度ガ超過シテイマス。大気圏デ燃エ尽キル可能性ガアリマス。逆噴射……』

べきっ！
アラームのスピーカーを叩き壊す。

そんなコトは判っている。
疾うの昔に御存知だ。
画面はと見れば……既にラプラスはいなくなっていた。

いや？
元からいない？
幻影か？

そんなコトはどうでも良い。
オレが為すべきコト……出来うる選択肢は２つ。

右手を逆噴射エンジンの起動ボタンに手を置き、左手を……急ごしらえで整備士が取り付けた観測機器切り離しボタンに手を置く。

「どっちだ？」

どっちでも１／２。そんなコトは判っている。
それでもどっちかを選ばなければならない。

「どっちなんだ？」

それぞれのボタンを押した直後の結果は……わかっている。
ならば？
最善と最悪の未来の狭間の現実で……
オレは……

片腕に力を入れた。
結果は……すぐに現れた。
不規則な振動とボロ船の回転となって。

「うわぁあぁぁぁっ！」
直後に……オレのボロ船は大気圏に突入し……地獄の業火のような炎に包まれた。

1．ある宇宙パイロットの選択（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
宇宙船内のコンピューターでも良かったのですが、そんな活躍をするコンピューターはないのでラプラスに出演して貰いました。

1．ある宇宙パイロットの選択の結末（前書き）

1／2の選択の結果

1．ある宇宙パイロットの選択の結末

「ニュースをお伝えします。半年前に墜落した宇宙船から墜落寸前に放たれた観測機器が謎の天体の正体を明らかにしました。天体は金星軌道上で小惑星と衝突、分裂し、２つの破片は近接しながら太陽系内を周回する軌道に乗っていたようですが、片方の破片に制御されて突入した観測機器による衝撃で両方とも太陽系を離れる予定です。そして観測機器が突入する寸前の観測と突入した時の反応から科学者達は天体が反物質でできていた可能性が示唆されています。なお、今回、これらの天体には観測機器を放った宇宙船のパイロットにちなみ……」

オレは病室の横のＴＶを消した。

「へえ。随分と有名なパイロットも居たもんだね」

「さあ？　何処にいたとしても宇宙船パイロットじゃねぇだろ？」

「なんだそれ？」

「墜落したんだろ？　その船？　だったらもうパイロットじゃねぇさ。ソイツは……」

確かに。違いない。と隣のベッドのヤツらは笑った。

隣のヤツらの笑い声の中で……オレはボロ船が上級クラスの垂直突入にも耐えられる装置のプロトタイプを仕込まれた船だったという幸運に感謝した。

ま、プロトタイプだったが故に随分と長く入院することになっているのだし、荷室が随分と小さく稼げなかったのだが……

感謝すべきだろう。
そんな最高級のボロ船を手に入れていたという幸運に。

そして……
あの少女にも。

「すべては1／2。そして現実は最善と最悪の狭間にある……か」

空は碧い。
オレは病室のベッドから……そんな常識的な現実（リアル）に感謝した。

1．ある宇宙パイロットの選択の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
宇宙船内のコンピューターでも良かったのですが、そんな活躍をするコンピューターはないのでラプラスに出演して貰いました。

2．ある宇宙鉱山技師の博打（前書き）

1／2の確率
1／2の博打

2．ある宇宙鉱山技師の博打

「誰だ？　オマエは？　オレに何をしろと？」

問うオレにその少女は無表情のまま問い返した。

『アナタには２つの選択肢がある。自分が滅びるか、地球を滅ぼすか。１／２の確率に揺れる狭間の選択肢が……どれを選ぶ？』

ココは月。

月のクレバスの底。

白い砂が堆積している広大な谷底。

空気のない場所で少女は宇宙服も着けずにオレを見ていた。

数時間前。

月の鉱脈探しに基地を出た。

基地と言ってもオレと同じ『山師』同士で造ったというか、政府から払い下げられた観測基地の１つを『山師』同士で金を出し合って手に入れて整備したモノだ。

新しいラグランジェ・ステーションが出来たとか、数週間後に月をスイングバイするとか、その時に深宇宙探査センサーを使って何十年か振りに月面を走査するとか、そのデータを使って鉱石探しに役立ちそうだとか浮かれている元科学者崩れの仲間を置いて前から怪しいと睨んでいた場所に独りで出た。

何の鉱石を探していたか？

決まっているだろ。

重水素をたっぷりと吸着させた金属鉱石。
出来るだけ細かく砕けて、出来るだけ長く太陽風に晒されている金属質の『砂』には重水素がたっぷりと含まれている。
普通の水素なんざ、そこらのどうでも良い石にもついているけどな。

もしくはレアメタル。
クレーターには落下した小惑星か彗星のコアの破片が散らばっている。
稀にダイヤなんぞが見つかることもある。兎に角、金になりそうな鉱石、鉱脈を探しに出たのさ。

簡単な分析機材を積んだ月面車で出かけ、あるクレーターの斜面下で分析を開始しようとした矢先に……足元が崩落した。

レゴリスだらけの月面。
元々あった亀裂をクレーターが出来た時に降り積もったレゴリスが隠していた。
それを踏み抜いただけ。極ありふれた間抜けな話だ。

気づいたらクレバスの下。
横には壊れた月面車。月の重力が優しい御陰で積んでいた装置は壊れていない。ただ、車には優しくない程度には強かった。
オレが助かったのは……月面車に積んでいた鉱石を入れるタンクがクッションになった所為だろう。周りに密閉タンクが1ダースほど転がっている。潰れたのが数個足元に転がっていたさ。

しかしだ……通信機は壊れているのか、電波が届かないのか雑音しか鳴らさない。
宇宙服が破けなかったのが不幸中の幸いなのか、幸いなる不幸なのか。

見上げてみれば……遙か上に絶壁の端。
遙か彼方の漆黒の空間に浮かぶ地球。

巫山戯たシチュエーションだ。
オレは皆がのうのうと暮らす星が見えるのに、向こうからはコッチが見えない。

仲間が探しに来る？
有り得ないね。
月の鉱脈を捜す『山師』同士。
１人帰ってこないとしても基地の「酸素と水の分け前が増えた」と思う程度さ。

それでも何処かに出口か登れる緩斜面はないかと捜そうとした矢先に……
……目の前に少女が現れた。

少女と言っても……人形だろう。
月面で宇宙服も着けずに、そしてマスクすら付けずにただ佇んでコッチを見ている。
姿形は……アンティーク・アンドロイドとして名高いゴチック・ドールの初期型。Ⅳ型とか誰かから聞いた気がするタイプだ。
これでも山師。
金になりそうな情報だったら、取り敢えず記憶している。

「おい人形。出口は何処だ？　知っているんだったら教えろっ！」
『出口はない。ココは月のクレバスの下。そして私は……人形、アンドロイドではない』

無表情に……動いているのかどうかさえ怪しい口から出る言葉。
言葉？　空気がない月面で？

「アンドロイドじゃない？　だったらオマエは何だ？　どうしてココにいる？」
『私はラプラス。アナタの星ではラプラスの魔女と呼ばれる存在。アナタの運命を伝えに来た』

相手の声が頭に響く。テレパシーというヤツか？　無線か？
いや。そんなコトよりオレの運命？

「どういうコトだ？」
『アナタには2つの選択肢がある。1つはこのままココで自分が滅びるのを待つ。この場合、約1年後にアナタの身体は発見され、この鉱脈にアナタの名前が付けられる。そして地球人類は空間跳躍技術を手に入れ、銀河へと旅立つことになる』

どういうコトだ？

「この鉱石？　ただの砂じゃないのか？」
『この砂は……』
少女は砂を拾いさらさらと下に零す。
『一見して……酸化チタニウムと分析される。だが、実体は……ディモノクォーターニウム・トリセドニウム化合体』

何だ？　それは？　聞いたこともない物質名だ。

『水素が……いえ、陽子が虚数次元振動を起こして結合した物質。モノクオーターニウムは３つの虚数次元で結合した水素。性質としては酸素と同じ。質量は……重水素と同じ。そしてトリセドニウムは１５もの虚数次元で結合した三重水素。性質としてはチタニウムと同じ。質量は……虚数次元振動幅の影響で窒素と同じに計測される』

『約半年後、別な場所の地下で酸化チタニウムの「砂漠」が発見される。質と量から人類はそちらを率先して開発する。その後でコチラが発見されても誰も振り向かない。……在る科学者を除いて』

『その科学者はココの砂を分析し、月の実験室で研究を重ね本当の性質に気づく。そして長き研究の果てに人類は虚数次元振動制御技術の初歩に気づき……空間跳躍技術を手に入れる。それが……』

少女はコチラを見つめゆっくりと言った。

『……アナタがココで滅亡した時の未来』

「巫山戯るなっ！　オレにココで死ねと言うのかっ！」

オレは怒鳴った。そうだろ？　誰でも怒鳴る。

『アナタがココからの脱出に成功した時……地球人類は別の運命を辿る』

「どんな運命だ？」

『全人類の滅亡』

「なにぃ？」

『ココの鉱石が採掘され……地球に送られて分析される。高エネルギー放射光分析施設によって……』

そりゃそうだろう。性質として二酸化チタニウムと同じでも質量が半分以下に軽いんじゃどんな科学者だって嬉々となって分析するだろう。

『結果として……ディモノクォーターニウム・トリセドニウム化合体は爆発する。高エネルギー放射光により総ての虚数次元振動が増幅された結果として……核融合爆発を起こす。高エネルギー放射光分析装置を、いえ、施設総てを破壊して……』

……え？　この鉱石はそんなにヤバイ代物なのか？

『誰もその爆発がこの鉱石の性質だとは思わない。人類は……それをテロリストによる核爆弾攻撃と分析する。運悪く……』

運悪く？

『分析しようとしていた時に施設を訪れていた某国の大統領と夫人が亡くなるという事態により……冷静な判断が失われ、全世界規模の紛争、核戦争へと発展していくこととなる』

……つまり？

『……結果としてココの鉱石をテロリスト達が手に入れ、全世界の要人達への『贈り物』とする。テロリスト達は冷静。自分達が仕掛けていないのは明白なのだから。『爆発』の原因がココの鉱石と気づき、そして『起爆方法』を発見する。それだけの違い』

つまりだ。

オレがココで朽ち果てれば、この鉱石の性質に気づくのが科学者。
そして人類は銀河への切符を手に入れる。

オレがココから脱出すれば、この鉱石の性質に気づくのがテロリスト。
そして人類は……滅亡する。

『性質の発見者の違いが世界の運命の分岐点となる。それだけ』

長い沈黙の闇にオレは沈んだ。

それでも喘ぐように……思いついたことを口にした。
「オレがそれを……この鉱石の性質を教えたら？　そうだ。科学者がテロリスト達より先にこの鉱石の性質に気づけば……」
『有り得ない。アナタがココを出るということは、あの崖を登るというコト。月の重力が地球の１／６とはいえ、運動としてはキツい。登る時に携帯できる酸素は少ない。結果としてアナタは低酸素症にかかり、言動が顧みられることはない。私のコトを話しても誰も信用したりはしない』

そうか。
そうだな。
月面で宇宙服も着けずにいた少女に教えられたといっても……誰も信用しないだろう。
オレが分析し、性質を見つけたと言ったとしても……山師のいうコトなぞ耳を貸したりはしない。自分達で分析しようとするだけだ。

低酸素症にかかってもかからなくても……
結果は同じ。

オレは……どうすればいい？

絞り出すように問う。

「他に選択肢はないのか？」

『さぁ？　アナタにあるのは……見てのとおり』

手をひらりとあげて少女は絶望を告げた。

『アナタは空気も水もない場所に独りでいる。ココから脱出するか、それともココに留まるか。存在する総ての選択肢がココにある。それだけが現実』

見渡す。まるで巨大な井戸の底。

いや？　墓場の底か？　神と悪魔の罠の箱か？

見上げる。遙か彼方に浮かぶ地球。

その地球の運命が……誰にも気づかれないオレの手の中にある。

『じゃ……私はそろそろ御邪魔させて貰う』

少女の姿が霞む。

姿が消える前に……オレは怒鳴った。

「見つける。見つけてみせるっ！　他の選択肢をオレは必ず……」

『見つけられることを……祈っている』

少女は消え、オレは独りとなった。

考えた。
時間だけはある。

水は？
我慢すればいい。

この服は完全密閉。水は外に出ない。壊れた月面車に積んでいた分析装置の中には清浄循環装置、簡単なフィルターもある。
『味』を我慢さえすればいい。それだけだ。

空気は？
無い。

いや、正確に言えば『限り』がある。
予備のカートリッジを含めて、低酸素症のリスクをギリギリまで考えても3日ぐらいだろう。

それでもオレは……
……生き残るために出来るだけ、出来る範囲内で藻掻き足掻くコトにした。

そして……総ての藻掻きと足？きが上手く行くことだけを祈った。
軽い低酸素症になり、マズイ水をチューブで飲みながら……祈り続けた。

何時間も……何日も……時間の感覚が無くなるまで……
漆黒の闇に浮かぶ地球を見上げながら……祈った。
遠離る意識の中で……祈り続けた。

2．ある宇宙鉱山技師の博打（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
キャラは「１０１人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。
さらにトンデモな性質についてはミクシィの中で書いている小説で設定したモノです。

2．ある宇宙鉱山技師の博打の結末（前書き）

１／２の確率
１／２の博打

2．ある宇宙鉱山技師の博打の結末

「ニュースです。昨年、発見された月の鉱石が全く新しい物理学を人類にもたらすこととなりました。発見された鉱石は発見者の名を……」

若い科学者がＴＶのスィッチをオフにした。

そして、ＴＶ横のベッドにいるオレに話しかけた。

「参りましたよ。アナタには。確かに発見したアナタには命名権がある。でも何も『ラプラス』なんて名前に改名しなくても良いでしょうに？」

「ふん。オレがオレ自身の名前を何にしようとオレの勝手だ」

「まぁ……そうですけどね」

科学者は淹れたての珈琲……じゃない温めたての珈琲パックを差し出した。

暖かさが心をくすぐる。

「それにしても……何故です？　発見されてから半年もの間、『採掘禁止だ。この鉱石は総てオレのモノだ。退院するまで誰にも採掘は認めない。分析も解析もオレが認めた相手にしか許可しない』って頑張ったのは？　御陰様で私がゆっくり解析できるようになりましたけど？」

科学者は不思議そうにオレを見る。

確率と未来の女神様だか魔女様に教わったと言ったところで冗談と笑い飛ばすだろう。

「ひょっとして……信号弾代わりに壊した月面車と分析機材のローンの請求審査でも終わるのを待っていたんですか？　救難時のため無償というコトになりましたけど」

確かに……オレは月面車を分析装置諸共、全て破壊した。
アノ場所に落ちてから数週間後に通るであろうラグランジェ・ステーションが月面走査する時間まで待ってだ。
案の定、月面走査していた連中はオレの居場所を見つけた。
そりゃそうだろう？
月面の亀裂から水蒸気が噴き出したらすぐに見つける。
もっとも……裏側を走査していたら見つからない。
確率は1／2。
オレは神が振るうサイコロによる博打に勝った。それだけだ。
それでも……救助に来るまでは4日ほどかかったがね。

何をして生き延びたのか？
あの時オレがしたのは……分析装置でディモノクォーターニウム・トリセドニウムを熱分解した。それだけ。

熱分解する時に『爆発しないでくれ』とだけは真剣に祈ったね。

モノクォーターニウムは元々は水素だが性質は酸素と同じ。
それで呼吸は数週間ほど保つことが出来た。
本物の水素は月の砂には吸着されている。勿論、ディモノクォーターニウム・トリセドニウムにも吸着していた。
ディモノクォーターニウムと水素を反応させて『水』を造った。
人間、水だけ在れば1ヶ月は生き延びられる。骨と皮だけになる

けどな。
サバイバルの基礎知識がオレを救った。
それだけだ。
そうそう。造った『水』が重水と違って身体に吸収されることも祈った。
これはダメ元だったな。
兎に角、造った『水』を密閉タンクに出来るだけ溜めて……月面車のエンジンを破壊して水蒸気に換えた。
流石にこれはタイマーを造ってオレは物陰に隠れた。
いや、決行の数日前から隠れていた。
『仕掛け』を作り上げた頃には、疲労困憊。
ラグランジェ・ステーションが通る頃には指一本も動かせないほどに衰弱するのは目に見えていたからな。

「それにしても……随分と変わった容姿になってしまいましたね。いまなら『宇宙人』役で映画デビューできますよ？」
訳のワカラン物質の『水』と『酸素』を摂った御陰で……髪はプラチナ色というかチタン色に染められてしまったが。
まぁ、重金属摂取障害にならなかっただけでも拾いモノだろう。
いや？　なってしまったのは『軽金属（？）摂取傷害』か？
「そうだな。『ラプラスの魔人』としてスクリーン・デビューでもしてみるか」
「御自身で脚本、監督、主演、そしてスポンサーでの映画を数本作れますよ。政府が新鉱石『ラプラス』を高値で買い取ってくれるそうです。御陰で私も栄誉と『おこぼれ』に預かれそうですよ。アナ

タが私を新鉱石の管理者として任命してくれた御陰ですね」

そうか。大金が懐に入ってくるのか。

「だったら……デビューは後だ」

「何に使うんです？」

オレは笑った。

「決まっているだろ？　深宇宙探検だ。空間跳躍の出来る飛びっ切りの宇宙船を仕立ててやるさ」

「ははは。それは良いですね。でも数年は待って下さいよ。理論は出来ても技術として実現するのには時間がかかりますから」

では、また来ます。と言い残して若い科学者は部屋を出て行った。

オレはベッドに転がって感謝した。

窓の向こうに浮かぶ地球。いや、地球を今見ている現実というヤツに。

総ての未来と……いまある現実に。

感謝した。

2．ある宇宙鉱山技師の博打の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
キャラは「１０１人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。
さらにトンデモな性質についてはミクシィの中で書いている小説で設定したモノです。

3．ある理論物理学者の選択（前書き）

2つの選択

生と死の間の選択

3．ある理論物理学者の選択

「アナタには選択しえる未来がある。アナタ自身の死とこの星系の死。どちらを選ぶのかを……」

雷鳴が轟き、氷のような雨が降りしきる中で少女は告げた。

「……1ヶ月後に決めなければならないだろう」

驚く私は少女の名を聞いた。

「私の名はラプラス。この星ではラプラスの魔女と呼ばれる存在」

雨は止まず、私の表情を凍らせていた。

数時間前。

私は自分の研究室を後にした。

長年研究し続けた成果がまとまりそうになっていたが、論理的なミスを数カ所見つけ、その修正の目処が立ち、心を躍らせながら研究所を出た。

この論文が世に認められれば、歴史に名を残すことが出来る。いや、歴史上に名が残らぬとも、細り続けた研究予算が少しでも増えることだけを祈って家路を急いだ。

月から鉱石が日常的に運搬される時代になっても公共交通機関から家までの移動手段は2本の足。それが地球に優しいだとか優しくないとかの社会運動には辟易してはいたが、実際の所、駅から家ま

では歩くのが良い。

変動幅が大きい気候は数週間前の真夏のような陽気から真冬のような雨と風を家路にプレゼントしてはいたが、私は別にどうってコトはない。

家には誰もいないし、この時間に帰ってすることはベッドの中に身を埋めるコトだけだ。

契約結婚した元女房からの養育費の請求書が届いているかも知れないが、子供達の写真すらも送ってこない以上は契約違反はお互い様。

……それでも、来週は確か上の子の誕生日だったな。

誕生日プレゼントと一緒に送っておくかと……他愛もないことを考えながら歩いていた私はふと足を止めた。

既に夜は深い。

誰も歩いていない歩道の先に誰かが立っている。

それは少女。

街灯の明かりが辛うじて届く場所に少女が1人立っていた。

暫く見て……私はその少女をアンドロイドと決めつけた。

時代がかった黒の外套着の下に見えるのはアンティークな黒いレースのドレス。手に持つ傘もまた黒い……レースの日傘。

もし少女が人間ならばこの気温と雨の中で日傘を持って立っていることなぞ有り得ない。

意地の悪い所有者の命令にアンティークな装いのアンドロイドが律儀に従っているのだろうと決めつけ……私は少女の方へと歩いていった。

……が、私の先程の決めつけは間違っていたとすぐに気がついた。
降りしきる雨が少女のドレスも外套着も日傘もそして長く美しい金色のような銀色のような髪すらも濡らしてはいなかった。
（……幽霊？　それとも誰かがホログラフィック装置で悪ふざけしているのか？）
疑問に思いながらも……私は関わらないことにして横を通り過ぎようとした時に少女から呼び止められた。
「アナタの運命を告げに来た」
……と。

「この部屋が私の『家』だ。悪いが何もない。来客用の椅子は３つ。論文を書く机に書き散らした論文。あぁ、せめて暖炉に火を付けよう。好きな椅子に座ってくれ」
私は少女を家へと招いた。
立ち話でも良かったが、私の身体が冷え切ってしまう。
長年の研究が結実しそうな時に風邪を引くのは勘弁したかったからね。
ボロアパルトマンの一室。私の全財産が散らばる部屋へと招き、暖炉に火をともした。
古い故に各部屋に暖炉がある。流行のというか常識的な暖房器具とは無縁の部屋は手がかかる代わりに部屋代が安かった。
「ココの家主がガイア神教徒なモノでね。暖房はこれだけだ。化石

燃料や太陽発電すらも嫌いらしい。顔を合わせれば『炭素循環』とか『ヒートスパイラル』とか『アイススパイラル』とか気象宗教用語で会話が成立しないほどだ。ま、コチラとしては安い部屋代の代償と割り切っている。さて……」

私は自分が定位置と決めている椅子に座り、来客用の古ぼけた椅子に座った少女を見る。

黒い外套着と日傘は畳まれて椅子の背もたれにかけられてはいたが……やはり、それらから水が滴ることはない。雨に当たってはいないようだ。

だが……私が空いた椅子の背もたれに無造作に置いたコートからは嫌味なほどに水が滴っている。

窓の外は未だ嵐。

どうしたら嵐の中で立っていながら濡れずに済むのか。

そんな方法があるのならば教えて欲しい。

驚いたのはそれだけではない。

あろう事か……古い飾りのない木の椅子が少女が座った途端に、アンティークな彫刻が施された椅子へと変貌していた。

手品でなければ……魔術だろう。

だが……少女が名乗った名がラプラスである以上、それは何らかの物理現象なのだろう。

「私の運命は……既に決まっているのかね？　全知の神であるラプラスの魔女さん？」

物理学上にだけ存在する悪魔の1人である「ラプラスの魔」。

決定論時代には物理学の至高の神として存在し、確率論時代には確率を操る悪魔として否定したくとも否定しきれない存在として生き続けている。

その「ラプラスの魔女」と名乗る以上、この少女の来訪は物理学

者の末席に名を連ねる私にとっては……天使降臨に近いと言える。

「決まっている。だが、選択し得る余地がある。その余地すらも正確に記述するのであれば、未来は確率として存在する。全ての事象は確率として揺らぐ。全て正確に把握するのは困難を極める。だが……確定している未来もある」

「それが？　『私の死』と『この星系の死』が天秤秤の両方の皿に載っているというコトなのかね？」

少女は黙って頷いた。

暖炉の火が燃えさかろうとしている。

「アナタの研究が……鍵となる。いえ、鍵となってしまった」

焔の揺らぎが……少女の瞳を揺らす。が、虚偽を告げていないことだけは感じられた。

「貴女が……」　何かを誤魔化そうとして私は茶化した。

「……ホウキに乗って現れなくて良かった。そして出会ったのが道端で良かったよ。何処かのテーマパークだったら……」

少女の瞳にある感情が浮かぶ。

「いや。冗談だ。取り消す。忘れてくれ」

「既に起こった事象を過ぎてから起こらなかったこととして否定することは不可能だ。だが……」

少女は私を真っ直ぐに見つめながら言葉を続けた。

「……この文明での一般的な慣用句としての意味は理解している。

謝罪の意として受諾しておこう」

私は「ありがとう」と言って立ち上がり、部屋の中を所在なげに歩き回った。

暫く歩き回り、意を決して確認した。

「私の研究が鍵となるのかね？」

「そう。数年前の正体不明の天体が観測センサーと衝突した際の反応から発想された……いえ。アナタの理論の裏付けとなった……研究が全ての鍵となる」

「私の研究が……鍵なのか」

言いたくはない。学会で発表をした後でなければ誰の質問をも受け付けるつもりはない。

だが……ラプラスの魔女ならば研究の中身を知っているのだろう。全てを

「少しだけ待ってくれ」

夜は長い。暖炉の中で薪が音を立てて軽く崩れるまでの時間が流れた。

私は黙って……暖炉にかけていたポットから来客用マグカップにお湯を注ぎ、ティーパックを放り込んで少女に手渡し、自分用のマグカップにもティーパックを放り込んで椅子へと戻り、少女を見て驚いた。

手渡したマグカップは……白磁の花柄のティーカップへと姿を変え……少女の手の中に収まっていた。

「確認したいのだが……」
「どうぞ」
「君に手渡したカップが変貌するのは……どういう理論かね？」
「ワタシは……ワタシの姿としての情報をこのアンドロイドの姿に決めた。そして人々が認識する『外見』という情報はワタシの姿に従属されて認識される。ワタシが今手にしているのはアナタが手渡したマグカップ。だが、ワタシという存在をアナタが認識する過程でアナタの脳内で別な情報に変換される。この文明の哲学という学問分野では一般常識化された法則だけど……数式で表した方が良いかしら？」
「いや。哲学は苦手なのでね。遠慮しておく」
「そう？」と少女は言い、カップの中の紅茶を一口飲んだ。

私は心が落ち着くのを待って、問い直した。

「さて？　どうして私の命が、存在がこの星系の存在を危ぶむのかね？　出来れば判るように教えて欲しい」
「今から1ヶ月後、月の研究所でアナタの友人がある発表を行う。それがアナタの運命を変える」
「どんな発表だね？」
「月で……ある鉱物、虚数次元振動物質が発見され、結果として空間跳躍理論が導かれるという発表が行われる」
「虚数次元振動物質っ！？　ハミルトニウムがっ！？　実在したのかっ？」

驚いた。
驚くしかなかった。
私が理論上の産物として予測した物質。それが鉱物として実在する？　そんなコトが？

「そう。アナタの長年の研究である『物理量ではなく物質としてのハミルトニアン』が実在した。月の鉱石として。そしてその物質が存在するのであれば……」
「空間跳躍は実現できるっ！　間違いなくっ！」

柄にもなく興奮した。
誰でも……どんな科学者でも興奮するだろう。
長年、理論研究し実在しないと私が信じていた物質。それが存在する。
だが……興奮は少女の言葉で冷水を浴びせられた。

「研究していたアナタならば理解できるはず。理論的な研究が無くとも実物が存在し、その実物を解析すれば……簡単に空間跳躍理論は構築できる」

長年……誰からも振り向かれることなく数式を築き上げて作り上げた理論が……実物の存在で……全てを奪われる。
足元の何か……いや、全てが崩れ落ちる感覚に襲われていた。

「……アナタは落胆し、自分の研究成果と発表された事実から別の研究へと進む。それは……時間跳躍」
「時間跳躍……それだ。それしかない」

私は呻くように同意した。

「そう。空間跳躍と時間跳躍は同じ事象の表裏。跳躍するベクトル、移動方向を空間ベクトルではなく、全ての空間に直交する時間軸方向へのベクトルへと変換すれば時間跳躍は不可能ではない」
「実現できるっ！　いや、実現してみせるっ！　虚数次元振動物質『ハミルトニウム』が、それがクォーターニウムか、オクタニウム

か、セドニウムかなんてどうでも良い。とにかくハミルトニウムのどれかが存在するならば時間跳躍も可能だっ！」

「そう。確かに可能。だが……」

私は沸騰しようとする感情を抑え、少女の言葉を待った。

「アナタの理論……いえ、アナタ達が持ちうる技術では制御は不可能に近い。結果としてアナタが作り上げた時間跳躍実験装置は……暴走する」

「暴走する……のか？」

確認する。私の研究を……栄光の行方を……

少女は事も無げに否定した。

「単に……ハミルトニウムは高エネルギー状況下では単なる『核消滅』反応しか起こさない。だが時間跳躍実験状況下では暴走する。暴走し……虚数次元振動スパイラルを引き起こす。スパイラルの形態は2つ。スパイラルがもたらすベクトルがマイナス、虚数次元へと向かった場合は……全てが虚数次元へと吸い込まれ消失する。ベクトルがこの次元へと向かったプラスのベクトルとなった場合は……解るでしょ？」

少女が……少なくとも私が構築していた理論の全てを理解していることだけは確実だった。そのパターンは私も計算している。いや、正確に言おう。それが最初に辿り着いた結論。そうならない可能性を追求して長き時を費やした。

「……虚数次元振動生成粒子との対消失」

つまりは反物質との対消失。その時に発生するエネルギーは……

「対消失で発生したエネルギーは虚数次元振動を増幅させる。結果としてさらなる虚数次元物質をこの時空間へと招き入れる。招かれた物質が更にエネルギーを発生させ……最終的にこの星系の全てを爆発させる。振動する空間内の物質平均密度が宇宙空間平均密度と同値になるまでスパイラルは暴走する。スパイラルが終息するのは……この星系の全てが対消失した後」

頭の中で……超新星爆発がイメージされた。

実際、そういう状況に近いだろう。

「そんなコトが起きても……宇宙としては平穏。この星系を観測している他星系知的生命体がいたとしても、虚数次元へと消失した場合は暗黒星雲に隠されたとしか認識はされない。対消失反応をした場合でも極超新星爆発として認識されるだろう。どちらも……宇宙全体では極ありふれた事象。銀河レベルで考えてもこの星系の存否など……嵐の中の雨粒の１つの挙動と同じ」

私の言葉は失われた。

窓を叩く雨粒が……ＢＧＭとして流れ……少女の言葉の賛同の拍手のように響いていた。

「虚数次元へと消失した場合、単純に言ってこの次元の正物質が『虚数次元反物質』としての反応……つまりは虚数次元宇宙での極超新星爆発した場合、この星系の物質は半径約１億光年の空間に素粒子として振動出現し、虚数次元振動は終息する。これもアナタの理論で計算済みよね？」

私は黙って頷き、椅子へと身を投げ、天井を見上げた。

少女が告げた内容は私が理論構築で導き出した結論の数々。その

全て。

「……つまりだ。私は……私の理論は、研究は無駄だったと言うことか？」

「無駄ではないわ。実物があっても理論構築には時間がかかる。でも……」

少女は紅茶を飲み、一息ついてから言葉を続けた。

「アナタの理論は時間軸に対しても対称的すぎる。マクスウエルの電磁波理論と同じ。極めてエレガントな時間軸対称理論。だけど半分は虚構。先行波と同じ理論解は無意味。だけど……アナタの論文を読み、理解できる人間がいたとしたら……間違いなく、時間跳躍の可能性に辿り着く」

少女は目を伏せた。

私は……ワタシに出来うる範囲での行動を問い直した。

「私が……ハミルトニアンを導き出した偉大なる数学者ハミルトンと同じように理論を発表せずに……時を過ごした場合は？」

数学者ハミルトンは……進歩的すぎて誰にも理解されない研究に没頭し……孤独に人生を終えた。

だが、彼の研究は……後世になって認められ、数学と物理学に名を残した。

それならば……私の功名心も少しは……

「……誤差の範囲。アナタが亡くなった後でもアナタの論文が存在すれば理解する人間は現れる。そしてハミルトニウムが存在する以上、実験しようとするだろう。実験の結果は……誰が行っても同じ。

結果は変わらない。変えるためには……」

私は椅子から飛び上がり少女を睨んだ。

「それで私に死ねと言うのか？　全ての研究を、論文を、理論と共に……闇へと沈めと言うのかっ！？　ハミルトンよりも惨めな人生を……送れと言うのかっ！？」

少女は……黙って頷いた。

「黙れっ！　認めるかっ！　認めてたまるものかっ！　そうだろう？　一体私はなんのために研究してきたというのだ？　実物が存在する？　私が築き上げた理論は必要とされずに実物から……実物を実験して築かれていく稚拙な理論が私が研究したレベルにまで辿り着くのを待てというのか？　それまで……私の理論が誰の目に触れられることを、可能性を閉ざせと言うのか？」

少女は頷いた。悲しげな瞳で……

「実験による理論構築は目隠しして通路を歩くようなモノ。壁にぶつかり中々進まないだろうが、落とし穴の存在には気づくだろう。落ちる前に……」

「アナタの研究、理論は足元を見ずに遙か先だけを見ながら歩くようなモノ。壁にぶつかることは少ないだろうが足元の落とし穴に気づくことはないだろう。気づいた時は……全てが奈落に落ちた後」

「黙れっ！　黙れっ！　黙れっ！　認めるかっ！　認めてたまるかっ！　そうだ。私の理論が正しければ虚数次元振動が暴走する可能性は……」

「黙りなさい」

私が……私の中の何かにすがろうとして発した罵声を少女の小さな……鋭い声が押し止めた。

「現実が理論に従うのではない。現実の全てを記述するために理論が構築されるのだ。この文明の科学者達はいつも同じ勘違いをする。現実は理論の従属物ではない。理論が現実の奴隷なのだ」

少女の声で怒りの旋律が奏でられ空気が凍結していく。そんな幻影を感じてしまうほどの……冷たい怒りだった。

「残念なことに、アナタ達は前提を既定事実と勘違いする傾向がある。物理学の本を開いてみるが良い。この文明では光と重力の到達距離が無限大と書かれている。何の実験も……検証もしてはいないのに確定した事実として受け入れられている。何故だ？　少なくとも検証されるまでは『前提』もしくは『仮定』としておくべき事項のハズだ」

「それに……アナタ達の理論構築の傾向は偏っている。現実の構成要因である事象を別々に解きほぐしそれぞれの構成を記述するだけ。例えるならばこのアパルトマンを破壊してそれぞれの部品の位置と材質を記述しているに等しい。このアパルトマンの設計図が得られてもアパルトマンそのものを造ることは出来はしない。必要なのは『設計図』と『材料』と作り上げる『技術』なのだから。技術を構築せずに設計図を手に入れ、使用部品だけが解っても……再現することは不可能だ」

私の怒りは……冷えて固まり、全ての感情を冷たい海の底へと沈

めた。
私の身体は……椅子へと落ちた。
まるで奈落に落ちたかのように……
「もし……月で虚数次元振動物質、ハミルトニウムが発見されずにアナタの論文が発表されたのであれば、研究は幾多の科学者に引き継がれ、理論構築が進んでいただろう。時間跳躍の危険性も共通認識される。だが、現実に物質があれば……誰でも実験しようとする。空間跳躍実験ならば破滅的な虚数次元振動を引き起こしたりはしない。だが、時間跳躍実験は……」
「今、この文明の技術では危険すぎる。……ということか」
少女は黙って目を伏せた。
時が淀みなく流れ……嵐はいつの間にか収まっていた。
暖炉の中の薪の半分が灰へと姿へと変えた頃、私はやっと別の質問を思いついた。
「それにしても……何故だ。何故、私にそんな情報を教える？　この星系の消失か爆発が……宇宙全体にとって取るに足らない事象ならば……貴女にとっても取るに足らない事象のハズだ。ラプラスの魔女ならば宇宙の全てを知っているのだろう？　何故、私に教える必要がある？」
少女は伏せていた目を上げゆっくりと私を見つめた。真っ直ぐに。
「この星系に残された時間は……少ない」
そして人類にとって未知である過去を語り始めた。
この星系の歴史を……

私を説得するかのようにゆっくりと静かに……

「この星系の第2惑星に芽生えた知的生命体は優秀だった。水が少ない環境下では文明の歩みは緩やかだったが……それでも直ぐに宇宙空間へと進み、第2惑星の衛星を開発し始めた。だが……時と共に愚鈍が彼らの知能の輝きを隠してしまった」

「彼らはたった数十年間の気候変動を大袈裟に考えすぎ、星が冷えてしまうと勘違いした。第3惑星が全球凍結していたという事実、そして凍結した大地に僅かに残っていた文明の遺物が彼らの恐怖を駆り立てたのは事実だ。何れにしても彼らは二酸化炭素などによる温室効果を期待して過剰に大気に放ち、最悪の事態を想定して衛星内に退避コロニーを作ろうとした」

「だが……彼らもまたハミルトニウムの制御に失敗した。衛星に作られたコロニーのエネルギー供給プラントが暴走し、衛星は第2惑星を離れ、星系内を彷徨う結果となった」

「衛星は第2惑星と同じ軌道を数周し……最終的には第2惑星へと衝突、落下した。結果として……」

「……第2惑星は唯一の衛星と共に自転エネルギーを失った。落下が致命的ともなったが……落下しなかった場合でも気候管理制御システムをも失われた惑星では温熱効果が暴走したままとなっていただろう。何れにしても……第2惑星からは知的生命体どころか単細胞生物すらも存在しない灼熱地獄となってしまった。それが……」

少女は悔しさを噛み締めるように言葉を続けた。

「……約36億年前」

そして冷め切っていたはずの紅茶を一口飲んだ。何故かまだ湯気がカップから立ち上っていたのが私にとっては不思議だった。

「ここ第3惑星は……恵まれてはいた。水が豊富にあった。だが、見方を変えれば豊富にありすぎているとも言える」

「表面高度の平均をとれば海面下２０００ｍとなるこの星は……約１０億年ごとに致命的な気候災悪に襲われる。それは……全球凍結」

全球凍結……この星の地上の全てが数千ｍもの氷に覆われるという私が知る限りでは地質学上の仮説。

「星系の主星である恒星の核融合反応は周期的に変動する。そして水が豊富にあるコトによる他の星と比較して高速な大陸移動がもたらす気候変動の振幅増大の帰結である全球凍結は……全ての文明を破壊する。全ての痕跡を風化させてしまうのだ。全球凍結が始まる時のスーパーブリザードと解除された時のスーパーハリケーンは地上の全ての遺物を風化させ……知的生命体も消滅する」

全てが凍りついた世界ではどんな高等生物も生き残ることは不可能。全てが絶滅する。

生き残れるのは……海底の単細胞生物ぐらいだろう。

「そしてやり直す。単細胞生物から知的生命体への進化を……」

私は絶句していた。

何度も……この星で、この地上で、文明の絶滅があったということに……

「順を追って説明すれば過去４回起こった全球凍結の間に発展した文明は……それぞれに輝いてはいた。第１文明はバランスに満ちていた。だが、彼らは宇宙へと進むことなく滅んだ。これは月が近すぎていたコトによる激しすぎた気象によりやむを得ない結果とも言えるが……」

「第２文明は不幸だった。第２惑星の文明の自滅がこの星系内、内惑星帯へのスペースデブリの拡散となってしまった。彼らの文明は月へと進出しながらも成熟する前に、第２惑星と衛星衝突により発生した巨大隕石の度重なる襲来で……滅び去った。月に残っていた第２文明の遺物もクレーターの生成と共に消え去った」

「第３文明は歪だった。宇宙へと進む前に原子力エネルギーに没頭しすぎた。愚かにも原子力だけに頼った文明を築き、宇宙へとは進まずに時が過ぎ、時間が……１０億年というタイムリミットが彼らの文明を破壊して終わった」

「第４文明は……第３文明と同様。宇宙へと進出せずに滅び去った。自然エネルギーだけに頼りすぎ、宇宙への進出自体を罪悪と考える愚かな宗教が蔓延り……１０億年という時間を無駄にしてしまった」

少女は悔しそうに目を伏せた。

「……現在の第５文明は理想的な速度で宇宙へと進んだ。だが、やはり自壊への道へと進みつつある。既に残された時間は少ない」

私はやっと言葉を取り戻し……質問した。

「全球凍結が……始まっているのか？」

少女は悲しげにくすりと笑った。

「いや……温室暴走だとしても全球凍結だとしてもこの星に残された時間は……この星系に残された時間は……少ない。この第５文明が、６億年前からの単細胞生物から始め直した知的生命が滅んだ場合、この星系で知的生命が宇宙へと進むことは……宇宙文明へと芽生えることはないだろう」

「どういう意味だ？」

「星系の主星である恒星が輝きを増す。生命存在帯域が外側へと移動し……次の１０億年の間に灼熱の惑星へと変えてしまうだろう」

少女は目を伏せた。

「第４惑星は小さすぎる。生物が芽生えても知的生命体へと進化する可能性は……０に等しい。この第５文明が最後だ。文明の制御下であれば第４惑星に移植は可能だ。空間跳躍技術が確立すれば他の星系への移住も可能となるだろう」

私は……疑問を声にした。

「我々を……私達が他の星系へと進むことを望んでいるのか？」

少女は目を伏せたまま、言葉を続けた。

「ワタシ達は……虚数次元跳躍を初歩として全ての次元を跳躍し、全ての宇宙を観測している。だがワタシ達も進化の袋小路にいる」

「ワタシ達は望んでいるのだ。ワタシ達と違う視点、違う思想でワ

タシ達と同じレベルに達する文明を。ワタシ達が気づかない何かを……何かに気づく存在を。この第5文明にはその可能性がある」

少女はカップを近くのテーブルに置いた。忽ち……カップは元のマグカップへと姿と変えた。いや、姿を戻した。

席を立ち、外套着を付け日傘を手にした。

「待て。最後に1つ確認したい。私の選択肢は……私の死以外にはないのか？」

少女は私を見つめた。

真っ直ぐに。優しい……憂いに溢れた瞳で……

「アナタの選択肢はアナタの中にある。生か死か2つの間に1／2の確率で……場合によっては甦ることもあるだろう」

少女は悲しげに笑った。

「アナタの決断が……少なくとも6億年の進化を無駄にしないことを祈っている」

夜が明け始めていた。

少女は窓から差し込む朝日の光の中に……光の中へと溶けようとしていた。

「待ってくれ。もう少し……」

「なに？」

何か……意義のある何かを尋ねようと思ったのだが言葉にならない。

逡巡したあとで口から出た言葉は……あまりにも愚鈍だった。

「……ホウキに乗らずに現れてくれてありがとう」

少女は驚き、そしてクスリと笑った。

「賞賛の言葉と受け止めておく。ありがとう」

そして……淡雪が春の日射しに溶けていくように消えていった。

「ワタシ達は待っている」

それが最後の言葉だった。

私は身じろぎ1つせずに……少女上が座っていた椅子を見つめ続けていた。

少女が座っていた時とは違い、素っ気なくなった木の椅子の背もたれを。

飽きることなく見つめ続け……

……そして決断した。

1ヶ月後、月である発表が為された。

私はその発表を宇宙空港で聞いた。

私の荷物は……私が長年、研究し続けていた論文。私の研究室と私の部屋の何処を探しても私が研究していた何かを導き出すことは不可能だろう。

私は研究室を辞め、旅に出ることにした。

自らの『死』を、私の研究の総てとの引き替えの旅を……

3．ある理論物理学者の選択（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としてのまとめの作となります。

キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。
さらにトンデモな性質についてはミクシィの中で書いている小説で設定したモノです。
全体としてはミクシィで公開している「硬度10」シリーズに近くなってしまいました。

なお、「ハミルトン」は実在する数学者、「ハミルトニアン」は数学上、物理学上の用語として実在します。
詳しくは……「四元数」で検索してみて下さい。

3．ある理論物理学者の選択の結末（前書き）

2つの選択

生と死の間の選択

3．ある理論物理学者の選択の結末

「助かったよ。確かに君の言うとおりだ。こんな計算ミスをするなんて……」
「気にすることはない。ミスは誰にでもある。問題はミスをしたことではない。間違いを正す方法を見つけることだけだ」
「ははは。貴方にはいつも助けられる。ありがとう。手伝ってくれて。感謝する」
私は月の研究所に勤めることにした。
友人の元で私の理論を封印し、彼の研究を手伝い、進める道を選んだ。

私の名は残らないだろう。栄誉は全て彼のモノだ。
研究者としての……科学者としての私は「死んだ」。今あるのは科学を進める技術者としての私だ。

「ああ。そうそう。朗報がある」
「なんだ？　鉱石『ラプラス』の発見者が研究予算を増やしてくれたのか？」
「ははは。あの人は何時でも気前が良い。違う話だ。朗報は……学会からだ」
「なんだ？　勿体振らずに言ってくれ」
「物質属名は『ハミルトニウム』に決定した。それぞれの物質名は『クォーターニウム』、『オクタニウム』、『セドニウム』。そして『ラプラス』は鉱石名として決定された。どうだ？　朗報だろう？　君の名が物質属名として残るのだから」
「私の名が？　君の名は……付けなかったのか？」

「ははは。そんなコトをしたら虚数次元数学を構築した偉大なる数学者ハミルトンに恨まれる。もっとも？　学会の連中が考慮したのも君ではなく、数学者ハミルトンだろうけどね。悪くはないだろう？　ま、偉人と同じ名だという幸運に感謝しといてくれ。君の御先祖さん達に。じゃ……」

立ち去る友人を見送り、私は窓の外を見た。

闇に浮かぶ地球。

その地球に住む全ての人々が祝福してくれている。

そんな感覚に浸っていた。

「……待ってろ。ラプラス。君の足元に……きっと辿り着いてみせる」

友人は空間跳躍の実験理由を何にするか悩んでいた。

空間跳躍だけでは予算が厳しいらしい。何か意義のある別の実験装置を跳躍させる理由が必要らしい。

だが……そんなのは決まっている。

『光と重力の到達距離の確認』

『暗黙の了解』としていた事項を『明確なる確認事項』へと変える。

それこそが……科学者としての私が甦る時だ。

3．ある理論物理学者の選択の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としてのまとめの作となります。

キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。
さらにトンデモな性質についてはミクシィの中で書いている小説で設定したモノです。
全体としてはミクシィで公開している「硬度10」シリーズに近くなってしまいました。

なお、「ハミルトン」は実在する数学者、「ハミルトニアン」は数学上、物理学上の用語として実在します。
詳しくは……「四元数」で検索してみて下さい。

4．あるサラリーマンの選択？（前書き）

私の「機密」が人類の……

4．あるサラリーマンの選択？

「アナタには選択しなければならない未来がある。アナタの死と人類の死。どちらを選ぶ？」

深夜。

来週の遠距離出張を控えた私の前に現れた人形のような少女はいきなり恐ろしいことを言った。

「ワタシの名は……」

「え～とだ。その前に少し……場所を変えても良いかな？」

立ち話も何なので……というか、既に終電に乗り遅れた私にとっては一刻でも早く身体を休める場所で横になりたかった。

深夜ゆえに何処かのカフェにでも入ろうかとも考えたが、既に開いている店はない。

ガイア神教の広まりと共に法律が制定されて深夜営業の店はなくなってしまった。

「地球をいたわろう」とは大層なモットーだが、深夜残業が頻繁にあるサラリーマンには優しくない。

月から鉱石が毎日届き、外惑星探査機の開発レースで資源獲得競争が各国と商社のシノギを削り在っている時代。

惑星よりも惑星の居住者に優しくして欲しいと思うのは私だけではないはずだ。

辛うじて見つけたのは……インターネット・サロン。

「サロン」というのは会員制のカフェだが、会員にはいつでも誰でもなれる。

いわゆる「ガイア神教法」をかいくぐるための方便だ。

「お客さん。……アンドロイドは料金は要りませんよ」と受付に言われるまで相手がアンドロイドとは気がつかなかったのは……多分私は疲れすぎていたのだろう。
兎に角、私は「サロン」の中の「コンパートメントルーム」に入り、椅子代わりのベッドに座り、未だ立っている相手を見上げた。
無表情な相手は……少しばかり不機嫌そうなオーラを放っていた。
「え？　……あぁ。えーと。悪いが接客用の椅子はない部屋しか空いていなかったようだ。隣で良いかな？」
相手は冷たい視線で私を見下ろしていたが……やがて「仕方ない」とばかりに目を伏せ、隣に座った。
アンドロイドなので……ベッドが思いっきり沈むのを予想したが……何も起こらずに普通にベッドは沈んだ。
（あれ？　金属フレームではなくてナノカーボンチューブプラスチックフレームなのかな？）
そんな超高級素材を使うアンドロイドなぞ……私のサラリーでは何十年かかるやら。
相手の所有者は随分と裕福らしい。

「さてと……え～とだ。どうして私の肩に人類の生死がかかっているのかな？　その辺を教えてはくれないか？　君の所有者からのメッセージを間違いなく……出来るだけ解りやすく教えてくれないかな？」
私は……相手がアンドロイドだと解った時から何処かの酔狂な「所有者」からのメッセージを伝えに来たのだろうと決めつけていた。
何故か？
「相手」の格好は時代がかった黒のロングドレスに黒のレースの日傘。

呼び止められるまでソコにいたとは気がつかなかったほどに深夜の闇に溶けていた。
誰でもそう思うだろ？
見知らぬアンドロイドが疲れたサラリーマンにある用事なんてそんなものだ。

「私の所有者？　そのような存在はこの次元、この宇宙には存在しない」

随分と大袈裟な表現だな。

「そしてワタシがこれから話す内容は誰かから言付かったモノではない」

あれ？　んじゃ、なんで？

「アンドロイドである君がどうしてワタシに用事があるんだ……い？　いぃっ！」

横顔で……相手から怒りのオーラが立ち上っているのが解る。解ってしまったのはサラリーマンとしての本能だろう。相手の出方、気分を即座に理解しないと商談の１つも……

って、アンドロイドなのにオーラ？

暫く経って……怒りのオーラが収まったのは、横目で睨む相手からちょっとずつ距離を取り、私が壁に張り付かんとしていた所為なのかも知れない。

「……アナタとは深いレベルでの会話は不可能なようだ。単純に伝

える」

それは有り難い。

何にしても早めに切り上げて横になりたいというのが偽らざる本音。

実際、瞼が重くなっている。

「アナタは……来週からソトーリビア国に出張に行く。そこで……」

「ちょっと待ったぁっ！」

私はいきなり眠気が吹き飛んだ。

「なんだ？　どうして？　我が社の機密というか秘密裏の行動予定を知っている？」

相手は……かなりビックリした表情でコチラを見ていた。

「……アナタにとっては『人類の生死』よりも『ワタシがアナタの行動予定を知っている』コトの方が驚異なのね？」

「当然だ。これでもそれでメシを食っている。機密が漏れたのならば重大だ。何処で……」

相手が呆れたような視線で入り口の方を指差している。

ゆっくりと振り向くと……受付にいた従業員がトレイにアイスコーヒーを載せて持ってきていた。

「……はい。ご注文のアイスコーヒー2つ。お客さん。これでもココでの商売は長い。アンドロイドに飲み物を供するのなんてのは別に珍しくはない。でもね……大声を出すのはやめて貰えませんか？

部屋の防音は完璧だと言っても、隣部屋から苦情が来るような事態と不用意に警察を呼ばれるような事態は出来るだけ避けたいんでね？」

従業員は脅すように……というか脅迫２４０パーセントで言い残して出て行った。

ああ。そうだ。相手がアンドロイドだと解る前に飲み物を注文していた。

忘れていた。

「……でだ。何で知っている？　私の出張を？」

場合によっては……上司の上司あたりまで『機密漏洩報告書』を提出しなければならない。

相手は呆れきったようにアイスコーヒーを手に取り、一口飲んだ。

「アナタの出張をワタシが何故、知っているのかということよりも、そこでアナタが遭遇する事態について教えておく。アナタの出張において何一つ傷害となる事態は発生しない。アナタはアナタの才覚通りの結果を得てユトリービア国から帰国するだろう。その２年後……人類は滅亡する」

「はい？　なんで？」

ソトリービア国は密林の中に出来た人工国家。

ガイア神教の中でもカルトな一派が密林の中に築いた国。

なんでも、こんな時代だというのに毎日、朝に長老が火を熾し、自生している植物の実やら、槍と弓矢だけで狩猟した動物だけで暮らしているという……早い話が『石器時代に戻った』生活を国是とする国。というか集団。

それでも万国平和連合、略して万平連においてその国家代表が議

長役を長年務めているのはガイア神教が全ての国に普及している所為だろう。

「アナタはソトリービア国へと辿り着くために最寄りの空港からイカダのようなボートを手こぎで濁りきった河を上り……2週間で辿り着くだろう。ハミルトニウムの採掘権を得るために……大丈夫か？」

私は……驚きのあまり、目と口が開きっぱなしになっていた。

相手に指摘され……自分の顔の表情を……慌てて直した。

「ど、ど、どうして……ハミルトニウムのコトを？」

ハミルトニウムとは……最近、発見された特殊な宇宙鉱石。

月で偶然に発見され、研究の結果、空間跳躍の理論形成の源となるといわれている特殊な元素。

その前にはこの星系に迷い込んできた彗星がその鉱石の塊だったと推測されたという情報もある。

我が社は……発表された情報からその鉱石の性質を割り出し……そして探した。

彗星としても存在するのであれば……過去にも地球に落下しているのではないかと。

そして見つけた。密林の痕跡クレーターの底にハミルトニウムの反応を。

その場所はソトリービア国の中。といっても外れ。

コチラとしては採掘するだけでソトリービア国の集落と生活には影響がないと説明すれば採掘が許される。つまりは採掘権が独占できるだろう……というのが会社の上層部の思惑。

相手は……私が命じられた機密事項を全て知っている。

別の企業のスパイか？　いやスパイならば私にその様な情報を……

「……何を考えている？　話を進めたいのだが？　いいか？」

相手に促され、私は黙って頷いた。

相手の話から少しでも機密が何処から漏れたのかを探らないと……

「そしてアナタは帰国する。そして……人類は滅亡する」

そうか。私が帰国すると人類は滅亡するのか。

それでは機密が何処から漏れたのかが誰にも解らなくなる。

報告すべき上司もいなくなったのでは誰に報告すべきが……困ったことだ。

……あれ？

「人類が滅亡する？　なんで？　そんなコトに？」

私の声のトーンが変だったのだろう。

「やれやれ。やっと解ったのか」と言うように、2度3度と首を横に振ってから相手は一息ついて言葉を続けた。

「アノ地域に暮らす人々は……ソコから別の地域に出たことがない。暮らし始めた数十年前からだ。通信連絡用の機材は持っているが、エネルギー源は太陽電池だ。他の物資が必要となった場合でも、関係者が空輸するだけ。しかもパラシュートによる方法。アノ地域に行って出てくる集団関係者もいない。アノ場所には外から中への一方通行。中から誰かが出て来たことはないのだ」

そうだ。そのとおり。なんでも『選ばれた人々』だけが参加することを認められている場所。

ソトリービア国の外部関係者達は「私もいつかは選ばれてアノ場所に赴きたい」と行っている連中ばかり。
外部の関係者に『鉱物採掘権』……（当然、その関係者には別のありきたりな鉱物の採掘としか言ってはいない）……の事を話しても、「私には決定権がない。ソトリービア国の宰相、つまりは長老に直接尋ねて貰うしかない」の一点張り。
仕方ないので、私が極秘裏に行くことになった。……はずだ。

「長年の……前文明時代の様な生活の中で彼らは特殊な免疫を手に入れた。それは『特殊な病原菌体』に感染しているからに他ならないのだが……」

そうか。特殊な生活をすると特殊な免疫が身につくのか……
……え？

「アノ地域に自生する植物の実と、その植物を糧とする草食動物の内臓を食した肉食動物の内臓に寄生する原生動物を必要以上に加熱しないで煮て食せば……擬似的な免疫を得て通常と変わらない生活を送ることが出来るが……その「食物」を摂らずに発病を押さえ込むほどの免疫を得るには最低でも数年はそういう生活を続ける必要がある」

……え～と、つまり？

「アナタがアノ地域に行き、感染し帰ってきた場合、人類全体に必要となるほどの量の免疫薬を造るのは……物理的に不可能。潜伏期間は1年。感染経路は空気感染。アナタが発病する頃には全人類が罹患している」

……どういうコトだ？

「つまり？　単純に言って？」

私の問いかけを……相手は呆れきってから返答した。

「アナタがアノ地域に行って帰ってきてから、１年後にアナタは正体不明の病気で死亡する。その後、１年で人類の大半が滅亡。生き残るのはソトリービア国の人々だけ。人類の文明は滅亡しする。理解したか？」

冷たく言い放つ言葉の印象で……私はやっと理解した。

相手が企業スパイではないというコトを。

「……アナタが行く前に「死」を選択するか、行ったとしても戻ってこずにアノ場所で「死」を迎えれば人類の滅亡は防ぐことが出来る。全てはアナタの行動にかかっている」

相手は……穴が空くほどに私の顔を見つめていたが……やがて、諦めたように一息ついた。

随分と感情表情が細やかなアンドロイドだ。

「……アナタはコトの重大さが完全には理解しているのかどうか、ワタシにも完全に把握することが出来ない。場合によっては……」

相手は立ち上がり……私を見下ろした。

「追加手段を講じなければならないが……ワタシが同一人物に重複して会うことは出来ない。もし……アナタの周辺で不可解な事象が起こった場合、それはワタシが起こしたことだと理解しておいてく

れ」

「じゃ……」と言い残し、相手は出ていった。

少しだけ時間がたってから……私は部屋を飛び出た。

「す、すいません。私と一緒に来た……あのアンドロイド見かけませんでした？」

受付に確認すると「さぁ？」と首を傾げた。

「なんにしても……ココから出ても料金は返しませんよ。もう一度来たら別にもう一度料金を頂きます。そういうシステムになっているモノで……さぁ。ご理解頂けたら部屋に戻って下さいな」

受付に促され私は部屋に戻った。

部屋で私は自分の迂闊さに腹を立てていた。

（しまった。相手の名を聞き忘れた。これでは「機密漏洩報告書」に不備が……）

……後のことは私の睡魔に聞いてくれ。

頭を抱えたままワタシは眠りについていたのだから。

そして私は2日後に思い出すまで……この事を綺麗さっぱりと忘れていた。

1週間後、私は出張の途についた。

予定が変わったのは提出が遅れた不備な「機密漏洩報告書」のことで上司に咎められたからだが……

長老との商談は予想外に進み、我が社は採掘権を独占することが出来た。
勿論、露天掘りは認められず、地上の状況には一切手を付けずにという条件付だった。
大した条件ではない。
そんなコトは予想済みだ。
万事上手く行った。これでワタシの人生の前途は明るい。

そして私は……帰国しようとイカダに乗ってソトリービア国、というか集落を離れた。

その1年後……私は……

4．あるサラリーマンの選択？（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては「外伝」的な作となります。

キャラは「１０１人の瑠璃」の中から１人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。

4．あるサラリーマンの選択？　の結末（前書き）

私の「機密」が人類の……

4．あるサラリーマンの選択？　の結末

……私はまだ、集落にいる。
いや、帰ろうとしたのだが、帰り道に迷ってしまい帰れなかった。
というか、道であった河が蛇行し、枝分かれしていたので、どっちが空港への流れなのかが解らなくなり……ついでに乾期に突入し、枝分かれした河が干上がっもいたので……結果として私は集落に戻るしか手段は無くなってしまったのだが。
そして……私は集落にいた年頃の娘と結婚してしまった。

単純に言って……子供が出来たのだから仕方ない。
ソトリービア国の人々……というか集落中で祝福もしてくれたし。

会社の方からは「営業所長」という肩書きを貰っている。
長老からも「ワタシ達の外交折衝担当として残ってくれ」とも言われているし。
何にしても頼られるというのは良いことだ。
私は退職するまではココにいるつもりだ。

そうそう。私が此処に来るというのを会社の同僚が聞きつけ、頼まれた仕事でも成果を収めることが出来たらしい。
頼まれたのは……簡単な血液診査機械を持っていき、データを送信することだったのだが……なにか変わったデータが得られたらしい。

無線通信で同僚から……
「君の御陰で特許が取れそうだ。医療分野でも新たな進展が得られるという快挙と共にね。退職したら君にも報酬と栄誉が届けられ

るだろう。それまではソコにいてくれ」
……と、何処か引きつった笑顔で説得されるように言い含められたが……頼まれたって帰るものか。

ココは一年中、裸でも構わないし、可愛い嫁さんと生まれたばかりの子供もいる。
周りも皆親切だ。何より深夜残業がないというのが一番素晴らしい。
朝日と共に起き、夕日と共に眠る。素晴らしきリズムの生活。

つまりだ……私はココから元の世界に行くつもりはない。

……この事を誰かに伝えるべきなような気もするのだが。
まあ、誰でも良いさ。

その誰かが何処かで呆れているような気だけは時々感じてはいる。

それにしても……誰だっけ？

4．あるサラリーマンの選択？　の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては「外伝」的な作となります。

キャラは「１０１人の瑠璃」の中から１人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択（前書き）

爆発する宇宙船の中でアタシは生き延びる方法を探していた。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択

「くっ！　ココにまで仕込んでいたのかっ！」
ほんの少しの爆薬で使い物にならなくなった脱出ポッド達の前で悔しがるアタシの横で……不意に誰かが声をかけてきた。
「アナタには選択することができる未来がある。自分の生存と人類の生存。どちらを選ぶ？」
振り向くと……時代がかった黒いドレス姿のアンドロイド。御丁寧に黒のレースの日傘まで持っている。
「アンタ……誰？」
「ワタシは……ラプラス。ラプラスの魔女と呼ばれる存在」
「え？　何？　ぅわっ！」
何処かで爆発音と不気味な振動が轟きわたり……アタシは宙に浮いた。
ココは宇宙。大型宇宙貨物運搬船の中。
アタシは1人で……生き残る方法を探していた。
「あ？　ターナー？　なんて言ったの？　もう一度言ってっ！」

ブリッジへと戻る通路で気密ヘルメットの通信機に怒鳴りながら後ろを振り返る。
何処の誰の趣味か知らないが、エマージェンシーサポートアンドロイドにあんな格好をさせておく必要はないだろう。

「犯人が捕まったのは知っているっ！　え？　爆薬は軌道修正スラスターにも仕込まれている？　どれだい？」

通信機で怒鳴っている相手は地球周回低軌道ステーションのコントロールタワーにいる仲間。
宇宙酔いする体質じゃなけりゃ、相棒にしてやっても良いぐらいなんだけど、上手く世の中は廻ってはくれない。
月軌道ステーションからの荷物を頼まれた時に……同僚が全員、期限切れの宇宙食にアタって、アタシ一人で運転することになったのが……運のツキ始めなんだろう。
『荷物』を低軌道ステーションに運ぶだけだったから簡単に考えていたさ。
その『荷物』も運び慣れた『水』の類。しかも量は満載の１／１０以下。
船のメンテナンス移動程度に考えて一人で乗り込んだ。

でだ。
移動途中でテロリストの犯行声明。
相手の理屈は『大地に存在しない宇宙からの「水」を……』何とかかんとか……
『水』を地球に運ぶのを許すの許さないのと……言い張るのはどうでも良いが、船に爆薬を仕掛けることはないだろうに。
兎に角、船は制御が難しい状態になってしまった。
コントロールタワーの指示は「脱出しろ。船はコチラから遠隔操

作する」だった。
指示に従って脱出しようとしたら、脱出用ポッドが目の前で壊されてしまった。
まぁいい。
脱出ポッドは他の場所にもある。
……と、別のポッドに移動しようとしたら変なアンドロイドが現れて、ついでに緊急信号が入ってきた。
それで慌ててブリッジへと戻っている。

「はい。着いたわよ。ターナー。……え？　いいから落ち着いて言って」
「アナタの運命は決まっている。アナタが助かるか……」
ブリッジへと戻って操縦席にベルトで身体を縛り付ける。横に……あの変なアンドロイドが立ち、何かを言いかけてきた。
「ちょっと黙っててくれる？　悪いけど。ソコに座って」
アタシは隣の副操縦席を指差してから通信機に怒鳴った。
「え？　なに？　誰かいるのか？　気にしないで。サポートアンドロイドよ。で？　用件は？　きゃあっ！」
叫んでしまったのは……近くで爆発が起こった所為。
そして通信機からは……雑音しか響かなくなった。
「……くっ！　んで？　アンタは何か知ってんの？」

横で……ベルトと格闘しているアンドロイドに声をかける。が、ベルトとの格闘に忙しいようで返答しない。

「……まったくっ！」

手助けしてアンドロイドを椅子に固定した。

「アナタには……」

何か言おうとしたアンドロイドを一喝した。

「いいからっ！　今の状況を教えてっ！　何がどうしたの？　どうすればいいの？　何か知ってんでしょ？」

焦って怒鳴る。

アンドロイドはちょっとだけ不機嫌な顔をしてから言葉を続けた。

「今この船は……低軌道ステーションへと向かっている。そして使用できうる制御スラスターは……船首の６個だけ。他のスラスターを使おうとすると……」

また爆発音が響く。

「……あのように爆発する」

振動が収まってから……アンドロイドに確認する。

「使わなくても爆発しているみたいだけど？」

「それは犯人に聞いてくれ。時限装置つきの爆薬。無駄に手の込んだ行動は……理解不能だ」

そりゃそうだ。
テロリストの考えるコトなんて知りたくもない。
「で？　アタシは何をどうすればいいわけ？」
「アナタが取り得る行動選択肢は限られている。４つ在った。それぞれ１／２の確率で存在する結果を導く方法が４つ。１つはアナタが爆薬が仕掛けられていない脱出ポッドを選択した場合。だがこの方法は既に……」
爆音が響く。
また何処かで仕掛けられた爆薬が破裂した。
「……失われた」
「確かに。目の前で壊されたわよ」
乗り込もうとした時、別な場所で爆発。その振動で脱出ポッドから転げ落ちてしまった。
その直後に数個合った内の１つに仕掛けられた爆弾が爆発。その余波というか振動で隣近所の脱出ポッドを破壊。
アタシが乗り込む予定だった脱出ポッドは拉(ひしゃ)げて、スクラップに早変わり。
まるで手品か悪魔の悪戯みたいだなと呆れ半分、怒りがほとんど状態。
それが隣のアンドロイドに合う寸前の出来事。
もう少し運が良ければ、アタシは既に脱出できていたはずなのに……
「で？　残りの３つは？」

アンドロイドの説明に少し苛つく。
自分の境遇にも苛ついている。
兎に角、さっさと判りやすく説明して欲しい。
「1つは……まだ破壊されていない脱出ポッドに乗り込み、この船を脱出する」
「それよ。それが良いわ」
席のベルトを外し、立ち去ろうとしたアタシに……告げられたアンドロイドの言葉は冷酷だった。
「その場合、アナタは助かるだろう。だが、代償としてこの船は低軌道ステーションに衝突し破壊する。そして破壊された低軌道ステーションは……約20時間後に地球に落下する。ちょうど……」
アンドロイドは……サイドモニターに映し出された地球の地図を指差す。
「カナー・シティ周辺に」
「なに？　なんだって？」
悪いが……低軌道ステーションにはターナーがいる。いや、アタシの直ぐ下の妹がステーション内のホスピタル・セクションで働いている。2人の子供を1人で育てている妹が……
そして……
「……カナー・シティには下の妹がいるんだ」
「知っている。来月、出産のようね？」
そうだ。そのとおりだ。

誰だ？　プライベート・データまでサポートアンドロイドに入力したヤツは？
見つけ次第、蹴飛ばしてやる。
「……それを回避するためには？」
「船首のスラスターを使用し、軌道を変える。それだけで良い」
無表情でアンドロイドは応えた。
「よしっ！　それで良い。やり方は？」
コントロール装置に手を伸ばすアタシにアンドロイドは続きを告げた。
「但し、その場合、別の結果が待っている」
「なんだ？　どんな結果だ？　どんな結果でもその方法を選ぶぞ」
船首スラスターの操作ボタンを見つけ、ボタンカバーに手を伸ばしながら確認した。
「その結果が……人類滅亡でも？」
「な？　に？」
驚き……カバーの上で指が止まった。
「その場合……もう直に始まる爆発により主制御装置の暴走し……メインエンジンが制御不能となりフルブースター状態となるこの船は地球へと落下する。積み荷と共に……」
地球へ落下。つまりこのまま船に乗っていたらアタシは助からな

い。
それは言わなくても判るけど……人類滅亡？
「それで？　どうやって人類が滅亡するわけ？　アタシは脱出ポッドで逃げ出して……船は大気圏に突入して終わりじゃないの？」
大型宇宙貨物運搬船といえども大気圏に突入すれば破壊されて終わりのハズだ。
「その場合……やはりカナー・シティ周辺に落下する。だが……燃え尽きずに落ちる部品の存在が問題なのではない。この船の積み荷が問題となる」
「積み荷が？　『水』じゃないの？」
「ただの『水』ではない。積み荷は……『ハミルトニウム水』。正確にはディハイドロジェンモノクオーターニウム。単純に言って……虚数次元振動物質水素化合物」
「全然……単純じゃないんだけど？」
アンドロイドが言うには……月で発見された新物質。輸送しているのは地上にある研究施設で分析するために『水』の形態で運ぶことになったのだという。
「この物質が……大気圏突入時に発生する高温と高圧に晒された場合、『爆発』する」
説明によると……虚数次元振動により発生する反物質と大気が反応し……爆発するのだという。
「まどろっこしいねっ！　つまり何なんだいっ？」
「つまり……大気圏上層部での大規模な核爆発が発生する」

「……え？」

「核爆発による衝撃波と熱で近くの地上は焦土と化すだろう。だがそれらは限定的。さらなる被害は……発生する高強度の電磁波。つまりはガンマ線によるオゾン層破壊」

「発生したガンマ線によるオゾン層破壊は全地球規模となる。修復には数十年はかかるだろう。だが……その間に地上の生態系は完全に破壊される」

「植物が破壊され、それを食する動物が絶滅に瀕する。生態系の頂点にいる人類もまた……絶滅するだろう」

アタシは……アンドロイドに怒鳴った。

「人類の絶滅？　そんなコトの前にっ！」

「……前に？」

アンドロイドは何処か驚いているような顔をしている。

「アタシの妹たちが死んじまうってのかいっ！？」

アンドロイドは……暫く表情が固まっていたが、やがて瞼を大袈裟にパチクリしてから頷いた。

「確かに……。大気圏上空の『核爆発』により低軌道ステーションの人々は電磁波の照射に晒されるだろう。だが……被害は限定的。この場合に脱出ポッドに乗っているアナタも助かるだろう。だが直近の地上は壊滅的な被害となる。爆発地点に近いカナー・シティは壊滅するだろう」

「そんなコトは認められないね。他に方法は？」
怒鳴った。怒鳴りつけた。感情のままに。
アタシはアッチコッチにぶつかって生きてきた。
でも妹たちは真っ直ぐに生きてきたんだ。
アタシが助かっても妹たちが……妹のどっちかが亡くなるなんてのは認められないね。

「もう一つの方法は……アナタが助からない」
「どういうコト？」

アンドロイドの説明は……簡単だった。
このままアタシが船に乗り、大気圏突入前に船首スラスターをもう一度操作する。
大気圏に船をできるだけ浅い角度で突入させるだけ。

「……この場合、船は大気圏に弾かれて宇宙を彷徨う結果となる。アナタが救助可能となる宙域に還ってくるのは……1年後」

「この船に積まれている酸素と食料では1年は持たない。アナタは餓死することとなる」

「おしっ！　それで行こう」
「は？」
「それで行くんだよ。アタシの命1つで全人類と低軌道ステーションと妹たちと妹の子供達が助かるんだ。何を迷う必要がある？」

アンドロイドは……もう一度、大きな瞳でアタシをじぃーと見てから、瞼をパチクリさせて……笑い出した。

「判った。アナタの性格を正確に把握していなかったのを確認できた」
「何まどろっこしい言い方をしてんだい？」
ツッコミながらアタシも笑い出した。
ん。そうだね。どうせ死ぬなら笑いながら死にたいものさ。
『……ハロー？　ハロー？　緊急回線で呼び掛けている。聞こえる？　聞こえたら返事してっ！』
不意に通信機が復活した。
「ターナー。遅かったね。で？　言いたいことは何？」
『その船の積み荷は危険……』
「はいはい。大気圏に突入したら爆発するんだろ？　知ってるよ」
『え？　どうしてそれを？』
「いいから。アタシの行動は決まっているよ。……ん？」
言いながらアタシは１つ思い付いた。
そして横のアンドロイドに確認した。
「あのさ。……なんてことをしたら、どうなる？」
アタシの提案をアンドロイドは驚いたような顔で聞き……そして無表情に戻ってから応えた。
「妙案。それでアナタが助かる可能性は最大限となる」
「確認だけど……妹たち、というかついでに人類が助かる可能性は？」
「最大限のまま。数値にすれば７５パーセントから９０パーセント」

「アタシが助かる可能性の数値は？」
「２５パーセントから１０パーセント」
「何だ。少なくとも１０倍はあるのか。アタシは幸運の女神に祝福されているね。きっと」
何の意味か判らずにきょとんとしたアンドロイドにアタシは応えた。
「アタシはね。１パーセントでの可能性があるなら突っ走るのが座右の銘なのさ」
アンドロイドはきょとんとしたまま固まっていたが……やがて笑い出した。
「……人類全てがアナタのような信条だったら、全ての宇宙、全ての次元が救われるのかも知れない」
「なんだそれは？」
笑いながら突っ込むアタシにターナーが呼び掛けてきた。
『何？　誰と話しているの？』
「いいから。ターナー？　実は来週アタシの誕生日なんだ。『プレゼント』を贈ってくれないか？」
ターナーは『その台詞は先月も聞いたわ。でも何？』と返しやがった。
ふん。「イイ女の誕生日は毎月、本人の望むままに在るのさ」と返してから、希望する『プレゼント』を告げた。
通信機の向こうで誰かとターナーが怒鳴り合っていたが……やが

て希望が返ってきた。

『判った。再来週のワタシの誕生日に返して貰うからね』

ありがと。ターナー。アンタはイイ相棒だよ。

そして……アタシとアンドロイドは船を操った。

アンドロイドが言ったとおり、数度爆発が起きて、主制御装置が破壊されメインエンジンがフルブースト状態となった。

剥き出しの暴力的な加速度でシートに身体が押しつけられる。

主制御装置が破壊された所為で、プログラムは1分程度しかメモリーされない。

自動操縦装置？

そんな機能は最初の爆発でぶち壊れていたさ。

凄まじいスピードで低軌道ステーションに接近し……間近を通り過ぎた。

何処かの窓から……直ぐ下の妹とターナーが見ていたのかも知れない。

でもアタシは自分の身体を操縦席に固定するので精一杯だった。

暴走するメインエンジンが発する振動で船がバラバラになりそうだ。

（ターナーっ！　『プレゼント』を忘れたら……酷いからねっ！）

アタシの心配は……杞憂だった。
やがて……『プレゼント』が船を追い越すのをモニターで確認した。
横のアンドロイドは……懸命に椅子にすがりついている。
可愛いじゃないか。
生還したら……相棒として貰い受けてやろう。

そしてアタシが押したボタンがプログラムの実行を指示した。
数世紀前のパソコン並みの処理能力しか残っていなかった緊急用補助制御装置は……健気にも命令を実行してくれた。
船首のスラスターのフルブーストをモニターで確認する。
そして……船は紅蓮の炎に包まれた。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては「続編」的な作となります。

キャラは「１０１人の瑠璃」の中から１人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択の結末（前書き）

爆発する宇宙船の中でアタシは生き延びる方法を探していた。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択の結末

「姉さん。ビデオレターが届いたわよ」
アタシは……今、低軌道ステーションのホスピタルセクションで治療カプセルの中にいる。

どうしたかって？
ターナーの『プレゼント』が効いたのさ。
頼んだ『プレゼント』は……何のことはない。ただのウォーターターンク。
低軌道ステーションにあった大型の補給用のタンク。
それにブースターを付けてアタシが乗っていた船の目の前で大気圏に突入させた。
突入した衝撃と高熱でタンクの中の水は蒸発。一時的に濃厚となった大気の御陰で……船は減速し、ついでに救助可能な軌道に乗ってくれた。
それだけ。
『プレゼント』が3個もあった御陰で……衝撃が凄く、船はバラバラになる寸前みたいだったけど……なんとか無事だった。
高温となった大気がプラズマ流となってブリッジに浸入しなかったのは……アタシの日頃の心掛けが良かった所為だろう。

兎に角、なんとか生き延びた。

でも……大気圏突入の衝撃と高温と、直後に宇宙空間に弾かれた後の低温に晒された御陰で……船のフレームは歪み、亀裂が走り……ブリッジも宇宙空間とハッチなしで行き来できる状態となってし

まっていた。
気密服を着ていたアタシは助かったけど……横にいたハズのあのアンドロイドは気がついた時にはいなくなっていた。
……宇宙空間に放り出されてしまったのか。
生き延びたアタシは……アンドロイドを捜し、やがて諦めて退避ブロックで時を過ごした。
脱出用ポッド？　そんなのは大気圏突入時の衝撃で何処かへ飛んで消えていたさ。
居住区域に備え付けられた退避ブロックは広く、それなりには快適だった。
大型船らしく10人近くが2週間程度は過ごせるだけの非常食と水もあった。非常用のエネルギー供給装置も生きていた。
でも酸素と水と食料は節約した。
いつ助けに来るのか。判らなかったからね。
孤独に耐え……気がつくとあのアンドロイドを探していた。
ドレスの切れ端ぐらい残って無いかと思って……ブリッジは数日おきに何度も探した。
何もなくて……亀裂から宇宙を眺め、部屋に戻る日々。
結果として……2ヶ月で助けは来た。
「それにしても……随分痩せたわね」
「なぁにちょっとダイエットが過ぎただけさ。で？　ビデオレターって？」
カプセル横のモニターで再生されたのは……下の妹の姿。

可愛い赤ん坊を抱いている。

『ほら。姉さんと同じ髪の色。そっくりでしょ？』

やめてくれ。アタシはそんな可愛くはない。

『悪いけど……姉さんと同じ名前にしようと思っているの。いいでしょ？』

どうかな？　こんなにアッチコッチに突っ走る姪っ子なんて……手がかかると思うぞ。

それに下手をしたら『地球の運命と……』なんてコトになってもアタシは知らない。

「で？　どうするの？　姉さん。また船に乗るの？」

ビデオレターを再生し終わった妹が尋ねてきた。

そうさ。アタシは宇宙に生きる。

孤独が似合っているのさ。

「でも……あの時話していた相手って誰なの？　ターナーさんが心配していたわよ。あの船にはエマージェンシーサポートアンドロイドなんて乗ってなかったって……」

ターナーのいうコトなんてアテにするな。

宇宙酔いする体質なのに低軌道ステーションで働くヤツなんてろくなヤツじゃない。

「それに……救助信号を発してくれたのって……誰なんでしょうね？」
「何の話？」
妹の話によると……船の状況からアタシが生きているとは思っていなかったらしい。
助けにはいけない距離でも船の状況は観察できる。観察の結果として救助する必要はないと思われていた時……正確にはターナーと御偉方が言い争っていた時に……救難信号が届いたのだという。
『船に生存者在り。救助願う』……と。

「それはきっと……」
アタシは言いかけて……不意に涙が溢れてきた。
「ん。何でもない」
あのアンドロイドだと言っても妹は納得しないだろう。
存在しないアンドロイドなんだから。

でも……そうだな。
自分の船を持ったら相棒としてアンドロイドを乗せよう。
アンティークっぽいフリフリの黒のドレスと黒のレースの日傘は……やめておこうか？
いや。洒落ていて可愛いかも知れない。

5．ある……壊れゆく宇宙船の中での選択の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては「続編」的な作となります。

キャラは「１０１人の瑠璃」の中から１人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです。

6．あるテストパイロットの選択　というか発案（前書き）

空間跳躍の実験機の中でワタシはラプラスの魔女に出遭えた。

6．あるテストパイロットの選択　というか発案

『アナタには選ぶことが出来る選択肢がある。アナタの死と人類の死。どちらを選ぶ？』

ワタシの前に現れた黒いドレス、黒のレースの日傘を持った少女は……アンドロイドのような無表情で恐ろしいことを言った。

でもワタシは……相手の出現を心待ちにしていたんだ。

「掴まえたっ！」

ワタシはいきなり飛びかかって相手を掴まえた。

「アナタ、ラプラスでしょ？　ラプラスの魔女。いつか遇えると思っていたんだ。やっと、遇えたぁっ！」

ラプラスはワタシの腕の中で……人に馴れない野良猫がネコ好きの人に無理矢理抱きかかえられた時のようにジタバタともがいてはいたがやがて大人しくなった。

『……嫌な予感がしてはいたのだが』

「ワタシがこういう行動に出るとは計算できなかった？」

『計算は終了していた。だから来たくはなかった』

「でも来なきゃならないわよね？　非常事態だもの」

時は……約17時間と29分ほど遡る。
ワタシは人類初の空間跳躍システム、『ラマヌジャン・エンジン』を搭載した試験宇宙船に乗り込み……木星軌道を目指して跳躍した。
無人実験機では99パーセントほどの成功を収めていたシステムだったけど、やはり有人というのは……色々と批判と憶測が交錯し、予定されていたパイロット達は辞退やらなにやらで、結局、テストパイロットとしては新人であるワタシにお鉢が回ってきた。
というかワタシが立候補したんだけどね。
でだ。ガイア神教徒達の反対のデモ行進で賑やかな地上と月面研究所の仲間達と、宇宙パイロット養成所の仲間達と、低軌道ステーションの知合いと親戚達に見送られて出発。
空間跳躍した直後に……やっぱり仕掛けられていたテロリスト達の爆薬でエンジンが異常動作。
つまりは暴走中。
どうなっていくのか判らなくなった時に……ラプラスの魔女が現れた。

「ふふん。アナタのことは教官とか教授とかスポンサーとか叔母さんに聞いていたんだ。ワタシのことは知ってるよね？」
『知ってる。約20年前。宇宙貨物船が低軌道ステーションに衝突しかけた時……その約1ヶ月後にカナー・シティで生まれた』
「そ。アナタが助けてくれた叔母さんの可愛い姪っ子。その前には探査機を積んだ御陰で人類の命と自分の命を天秤にかけることになった元パイロットの教官の可愛い教え子。さらには飛び級で研究所に入って、元研究者で技術者になりながらも、やっぱり共同研究者として名を馳せることになった『ラマヌジャン・エンジン』の開発者の可愛い教え子。その前にはアナタが助けたというか助言した虚数次元振動元素鉱石を発見した『山師』が設立した奨学制度で一番

の成績を修めたついでに容姿も誉められて賞賛され、直々に表彰されたのが飛び切り可愛いワタシ。……って自慢しかしてないのかな？　自己紹介のつもりなんだけど」

相手はワタシの腕の中でじとーっとした視線でぼそっと呟いた。

『……厚かましいという自覚が少しはあるというコトだけは認めておく』

「でさ？　ワタシの関係者様達が全部アナタのことを言っていたのよ」

叔母さんなんか背格好が近いというアンティークアンドロイドを集めては黒いドレスに黒のレースの日傘を持たせて自分の船を操る時の相棒としているぐらいなんだから。家にも何体もの予備のアンドロイドがメイドとして働いているし。ワタシにとって相手の姿は見慣れた姿なのさ。

「だから今度はワタシの番だと思っていたのよっ！」

『……どうしてそういう状況からそのような予測を立てたのかは疑問だ』

「だってワタシは生まれてからちょうど17年と29ヶ月。乗った船のシステムがラマヌジャン・エンジン。つまり『ラマヌジャン』で『1729』なんだから遇えるかなと思っていたのよ～」

＊＊＊＊＊「ラマヌジャン」と「1729」については……Webで検索してみて下さい＊＊＊＊＊

相手は呆れたような空虚な視線でワタシを見ていたが……やがて頭を小さく左右に振って呟いた。

『つまらぬ数字のただの偶然だ』
「つまらなくないわよ～　だってアナタと出遭えた記念の数字だもの」
相手は深く溜息を吐いた。
『……やりにくい』
相手の言葉を無視してワタシは尋ねた。
「ところで……この状況はどういうコト？」
言い忘れたが……ワタシの身体は半透明。いや、実体は操縦席に座っているのだが、今のワタシはそのワタシの身体を見下ろしている。ついでに壁とかも手足がすり抜けている。まるで幽霊。実体の方は……時間が止まっているかのように微動だにしていない。
『アナタの意識が実体化している……端的に言えばそういう状況。故にワタシに触れることができている』
あ。なるほど。
「つまり……アナタも『意識』的な存在なんだ？」
そういうコトならば何処にでも神出鬼没だ。
相手は視線を逸らして呟いた。
『そういうコトだとも言えなくもない』

なんか負け惜しみっぽいな。

「でさ？　どうして人類の命がこの船に関わってくるワケ？　空間跳躍に失敗したとしてもワタシと船が虚数次元空間で消滅するだけで関係ないんじゃない？　つまりワタシが死んで終わり。違うの？」

『流石はあの人の姪っ子だ。自分の死に直面しても割り切りが早い』

「そだよ～　母さんにも『なんか姉さんの子供を代理出産した感じ』って、いつも言われていたからね。で？　なんで？　さっさと言ってくれないかな？」

ワタシに急かされて相手はもう一度、『本当に……やりにくい』とか呟いてから説明を始めた。

『この船は異常なエンジンの挙動により通常空間への出現位置が予定とずれる』

『結果として出現するのは第６惑星軌道上ではなく第６惑星内となる』

『第６惑星内部には金属水素がある。出現時の空間振動、つまりは虚数次元振動により金属水素は虚数次元振動物質、ハミルトニウム属元素としては最も不安定なハーフニウムとなる』

『さらにこの船のエンジンであるラマヌジャン・エンジン内部の次元振動が引鉄となって……』

相手の説明でワタシも予想がついた。

「そっか。木星内部で核消滅反応が起きるってワケね。つまりは大規模な核爆発だ」

頭の中の計算だと……爆発は最大、木星の質量にして１０パーセント前後。
それでも爆発自体が人類滅亡への直接な原因となるほどの規模ではないはずだけど。

『そうだ。結果として第６惑星は軌道を変える。爆発が公転軌道後方座標で起きれば惑星の公転速度は増加する。前方座標で起きれば公転速度は減少する。何れにしても第６惑星はエキセントリックな軌道へと変化する』

なるほど。ソコまで説明されればワタシにも結果はわかる。

「木星が彗星のような長楕円軌道となって……他の惑星が弾き飛ばされるってワケか」
『そうだ。エキセントリック・ジュピターと人類が呼ぶ種類の惑星軌道となる。このような軌道を巨大ガス惑星が巡る星系では知的生命体は持続できない』
「ハビタブル・ゾーンから弾き飛ばされたんじゃ……良くて宇宙を彷徨う氷惑星。悪くて太陽か木星に衝突消滅。どっちにしても人類は滅亡だねぇ」
『……で、アナタが助かるには』

相手の言葉をワタシは遮った。

「ワタシのコトなんてどうでも良いのっ！　人類が助かる方法を教えなさいよっ！」

そうでしょ？　先ず確認すべきはその方法。

『今できることは限られている。コントロールできるのは出現位置座標の入力とエンジンの……』
「エンジンの破壊？　ぐらいだよね」
何故か「エンジンを壊そう」と思った瞬間に……片手にバールが出現した。
「あれ？　そっか。意識が実在化する次元か」
ならば話は早い。片手にバール。片腕に相手を抱えてワタシはエンジンルームへと壁をすり抜けて移動した。
で……バールを暴走しているエンジンへと振り下ろし……
……何も起こらずにバールはエンジンをすり抜けた。
「あれ？　なんで？」
『意識下での実体した道具が現実の物体に直接影響を及ぼすことはない』
「んじゃ、なんで『エンジンの』なんていったのよ？」
ちょっと怒りながらいうワタシの態度を無視して相手は言った。
『エンジンの破壊とは言ってはいない。だがエンジンの停止はできるはずだ』
相手はエンジンのコントロールユニットを指差した。
『今の状況でも「信号の挿入」はできるはずだ。暴走しているとはいえ、停止信号の挿入は意識を信号として発することで実行できる』

「なるほど。それで？　人類が助かる最大確率のタイミングは？」
『その前に……自分自身が助かる方法は確認しないのか？』
そういえばそうだ。
「一応聞いておくわ。どうすればワタシが助かるの？」
『基本的には……無い』
おい。んじゃ何で確認させたのよ。
『エンジンを停止させ、然るべきタイミングで脱出する。この船も実験機とはいえ脱出装置は装備している。空間跳躍収束装置、つまりは虚数次元振動収束装置も搭載しているはずだ。それでアナタは助かるだろう』
「その場合、この船はどうなるの？　それが人類が滅亡する最大確率なんでしょ？」
相手は……大きな瞳を閉じて『本当にやりづらい』と呟いてから続きを言った。
『この船は……脱出装置がコクピットごと離脱することにより跳躍出現位置が大幅にずれる。それはちょうど第7惑星内部になる』
『後は……同じ。第7惑星内部にも金属水素は存在する。先程話した状況が第7惑星に発生する。エンジンを停止させたとしても出現直後は船自体が虚数次元振動をしている。結果として第7惑星がエキセントリック・プラネットとなり、いずれは第6惑星をエキセントリック・プラネットと変えるだろう』
相手の話にふと違和感を感じる。

「あれ？　でも今は木星と土星は一直線には並んでないわよ？　なんであさっての方向に出現位置が変わるのよ？」

『それが虚数次元振動による空間跳躍の仕組みだ。後でゆっくり計算してくれ』

ふむ。なるほど。

『さて……ワタシがアナタに告げるべき「情報」は全て伝えた。そろそろお暇したいのだが……』

もぞもぞとワタシの腕から逃れようともがきだした。

「ソッチの用事が済んでもコッチの用事が済んでないわよ？」

『やっぱり』と言いたげな表情で抵抗するのを諦めて……借りてきたネコのようにグデ～と脱力する。

「それにまだ『人類が最大確率で助かる方法とワタシが助からなくなる方法』を聞いてないわよ？」

相手はきょとんとした顔になり、『そうか。言い忘れていた』と呟いてから説明を始めた。

『その場合もまた、方法は同じだ。あるタイミングで脱出する。その場合の結果は第６惑星内部、もしくは第７惑星内部に出現するのが脱出装置となる。この船は第５惑星軌道の何処かに出現する。すぐに第５惑星の残骸に衝突して破壊されるだろうが人類および第３惑星、さらには人類が宇宙に築いた各種構造物には影響は出ないだ

ろう。もちろん……』
「木星か土星内部に出現するワタシは助からないけど……ね？」
『そういうコトだ』
なんだ。同じ方法で結果が違う……って、それは教官のケースと同じか。
「んじゃ。仕方ない。その方法で……ん？」
あれ？　何か聞き忘れているような……確認し忘れているような……
「ワタシができることは……『意識』で『信号』をコントロールユニットに挿入、つまり入力できるってコトなんだよね？」
相手は『やれやれ。直ぐにソコに気づくか』と言いたげにクスリと笑った。
『そういうコトだ。ワタシが説明した他の方法に気づいたのかな？』
「ラプラス～？　アナタ、本当は意地悪なんでしょ？　それに本当の名前は何？　『ラプラスの魔女』ってのはワタシ達の文明、科学上での形象名だよね？」
相手は……驚いたようで大きな瞳をパチクリさせた。
『ソコまで気づいて……尋ねられたのは初めてだ』
「んじゃさっさと教えなさい」
軽く睨むワタシに相手は悪戯っ子ぽく笑った。

『そうだな……生還したら教えることにしよう』

「その言葉、忘れないわよ～」

そしてワタシはワタシが思いついた方法を実行した。

6．あるテストパイロットの選択　というか発案（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては全ての話の「続編」的な作となります。

キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです

6．あるテストパイロットの選択　というか発案　の結末（前書き）

空間跳躍の実験機の中でワタシはラプラスの魔女に出遭えた。

6．あるテストパイロットの選択　というか発案　の結末

「さあっ！　皆様っ！　これから人類初の有人空間跳躍が始まろうとしています」

アナウンサーの後ろのモニターで空間跳躍実験機がラグランジェ・ステーションから離れ、ゆっくりとメインエンジンに火が入り、速度を上げていく様子が映し出されている。

「5、4、3、2、1……空間跳躍開始っ！」

一瞬、宇宙船が虹色の光に包まれ……直後に消え去った。

歓声と響めきが響き渡り……拍手が鳴り響く。

「見事っ！　実験機は空間跳躍を始めましたっ！　出現予定箇所は木星軌道上っ！　出現予定時間は今から約91時間後……って？　あれ？」

アナウンサーが驚いたのも無理はない。

虹色の光が再び出現し、その中から……先程消え去った、実験機が出現した故に。

実験機は……メインエンジンが暴走してはいたが、直ぐにエンジンを停止させ、スラスターで挙動を修正しラグランジェ・ステーションに接続した。

人々が見守る中……ハッチが開き、中から現れたのは……

「皆様っ！　ワタシはこのとおり無事に空間跳躍を果たして帰って参りましたっ！」

小脇に何かを抱えているテストパイロットの姿だった。

「えーと。どうして帰ってきたんでしょうか？」

すかさず近づき質問するアナウンサーにパイロットは声高らかに応えた。

「きゃはは。エンジンが何者かに爆破され暴走したので、出現座標を当初の予定から変えて生還致しました。まさか虚数座標を入力したら時間跳躍になるとは思わなかったけど」

「はい？　なんの意味です？」

「だから全ての空間軸座標に直交する虚数座標を出現座標の代わりに入力したのよ。意識の力でっ！　そしてら時間跳躍になったというわけっ！　時間軸振動方向に実数を入力した場合は失敗続きだったけど、結局というか結果として空間軸座標に虚数を入力すれば時間跳躍になるってコト。それは……」

一般人には理解不能な説明を続けようとするパイロットの言葉を遮るようにアナウンサーは尋ねた。

「所で……小脇に抱えている縫いぐるみは？　なんの意味でしょう？」

「なんて事を言うの？　これは縫いぐるみじゃなくて……って！　あれ？　ラプラスっ！　何処に逃げたっ！　許さないわよっ！　出てらっしゃいっ！」

テストパイロットが叫ぶ映像を流していたＴＶモニターに微笑んで部屋の主が呟いた。
「そっか。ラプラスに出遭ったのか。あの子も……」
レザースーツを肩にかけて周りを取り巻く……黒のドレス姿のアンティークアンドロイド達に声をかけた。
「さて。そろそろ出かけるわ。今度は……そうね。ナンバー９１。アタシに付き合って」
呼ばれたアンドロイドが部屋の片隅に立てかけてある黒のレースの日傘を持ち、従った。
「後のは……いつも通り。留守の間、部屋のメンテを頼むわね。あ、ナンバー１７２９。悪いけどＴＶ消しといて」
部屋の主が出て行った後……呼ばれたアンドロイドがＴＶのリモコンを取り、ＴＶに向けて電源ボタンを押した。
直後にテストパイロットが叫ぶ映像が消え、リモコンを操作したアンドロイドの姿を鏡のように映し出した。

消えたＴＶに向かって悪戯っ子ぽく、片目を瞑って小さく舌を出すアンティークアンドロイドの姿を。

そしてアンドロイドは……機械らしい無表情に戻り、自分の仕事をしに部屋の奥へと消えていった。

6．あるテストパイロットの選択　というか発案　の結末（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
「ラプラスの魔女」としては全ての話の「続編」的な作となります。

キャラは「101人の瑠璃」の中から1人使ってます。
トンデモな物質名は、元々は「アコライト・ソフィア」の杖の材質として考えていたモノです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8618p/

ラプラスの魔女 短編集

2011年8月2日08時48分発行